

江城年録三

寛永五年<sup>戊辰</sup>

正月大

朔日 公方様為御礼西の丸<sup>江</sup>御成還御以後御礼初御連枝御

家門御出仕紀伊殿水戸殿御出仕<sup>御装束</sup>駿河殿<sup>同上</sup>御

本丸御盃之次第初献御盃紀伊殿駿河殿水戸殿御頂戴御服

御拝領二献駿河殿戴其盃紀伊殿其盃水戸殿御納三

献御盃紀伊殿頂戴其盃駿河殿其盃水戸殿御納御盃之時御

加有之

一 二日朝紀伊殿水戸殿西の丸<sup>江</sup>御出仕御装束<sup>甲</sup>昨朝

御盃之次第

初献御盃紀伊殿水戸殿御頂戴其盃御前<sup>江</sup>上納御加有之

二献御盃紀伊殿水戸殿<sup>二</sup>納

三献御盃同之

一 二日之晚御本丸御謠初御連枝御家門御譜代大名出仕

御盃之次第

初献<sup>御引わたし</sup>御盃紀伊殿駿河殿御頂戴其盃

御前へ上御盃水戸殿頂戴其盃參河御譜代衆しきみより

外<sup>二</sup>御引渡すわる衆へ入達て通<sup>二</sup>献<sup>ひれもの</sup>御盃駿河殿

其盃紀伊殿其盃水戸殿初献之時のごとく通

三献<sup>ふきの</sup>御盃御ひかへの時観世四海浪を謡御盃紀伊殿

頂戴御肴星物拝受其盃駿河殿其盃水戸殿初献の時

のごとく通

ふきの臺出候<sup>進上</sup>の臺共引付●上

小謠有之候其まで御はやしありふきの臺之時追付星の物

出

御盃の臺の御盃駿河殿頂戴御肴<sup>二</sup>星物拝受其盃

御前へ上御盃毛利甲斐守頂戴盃通御盃之臺の御盃水戸殿

頂戴御肴<sup>二</sup>星物拝受其盃 御前へ上御盃立花飛騨守頂

戴盃通御盃の臺の御盃紀伊殿頂戴御肴星の物拝受其盃

御前へ上御盃御譜代大名衆頂戴盃通此間<sup>二</sup>御盃の御盃頂

戴之大名五六人有之御納の臺出候時酒井雅樂頭観世大夫

七太夫<sup>二</sup>御服被下役者共<sup>二</sup>御折 被下

御ひかへの時観世立て舞七太夫も舞さて御肩衣を観世<sup>二</sup>被下

候を雅樂頭大夫<sup>二</sup>渡すさて駿河殿紀伊殿水戸殿肩衣をぬ

き大夫<sup>二</sup>被下候得と被申候時右御三人居座を御立肩衣をぬ  
き被成候を雅樂頭取大夫にわたさるさて御前へ御礼被成  
御退出

三日證人衆之御礼

四日代官衆御礼

六日出家社家山伏御礼

七日町人御礼

一 正月五日神田筋違橋の邊<sup>二</sup>駿河大納言御家来仙石主水

と同御家来加藤九十郎と申仁打果主水主従五人うたれ九

十郎方<sup>二</sup>も手負四五人有之候得共九十郎<sup>ハ</sup>無相違立退申候

是<sup>ハ</sup>去々年御上洛之節右両人駿河殿致御供於岡崎右両人口

論いたし主水扇を九十郎<sup>二</sup>投付申候此意趣にて去年中主水

を称らひし処主水今日寺参いたし候をつけ来九十郎大勢

にて道々待請候て鎗<sup>二</sup>突し間主水煩て馬より下刀をぬき

相防候得共大勢鎗にてかかり候間終<sup>二</sup>九十郎是を打果し九

十郎立退申候是<sup>ハ</sup>御鷹匠頭加藤伊織<sup>二</sup>男なり

一 十八日於西の丸初<sup>二</sup>將軍様へ御茶を被進御相伴駿河殿紀

伊殿水戸殿夜七ツ時分御支度七<sup>二</sup>半<sup>二</sup>御登城大手の橋より

内の御門櫓御門の下番衆の番所にややしはらく紀伊殿駿

河殿水戸殿御一所に將軍様出御を御待明六少過<sup>二</sup>

將軍様出御それより御三人御供御敷寄屋の外露地の堂<sup>二</sup>

六<sup>二</sup>半迄將軍様御待堂の内へ御三人をめし御はなし御坐候内

に永井信濃守御迎<sup>二</sup>罷出御敷寄屋へ入御信濃守まぢりあ

かりの戸をあけ則御草履をもなをし申候

御掛物 きたう 一 御花入 下座解正

一 御茶入 ならしは 一 御釜 おりへかま

一 御水さし かなかねち 一 御盃 ぬのぼん

御掛物 見申候得との御説にて御三人ながら御覽御炭

過候てより御膳出御酒三篇目に 相国様御茶たて口より

出御被成何も御酒まいり候様にと御しひ被成候それより

後御湯出御中立<sup>二</sup>紀伊殿御先へ御出御草履御なをし候はん

と被成候を内藤外記へまはり何公仕罷在なをし候少の間

御晦<sup>ゴシ</sup>かけ<sup>二</sup>被成御座候御三人御前<sup>二</sup>御伺候扱將軍様へ外露  
地のたうへ御座被成御くつろけ被成御三人へ外露地内露地と  
の間<sup>二</sup>被成御坐候處<sup>二</sup>道句御手洗を持參候<sup>二</sup>御手水御つかひ  
候てさてどろなり御敷寄屋へ入御草履<sup>ハ</sup>駿河殿御なをし  
候はんし候<sup>被</sup>内藤外記居合なをし申候御座敷御居かは  
り被成候御花<sup>ハ</sup>黄梅ひかへ<sup>者</sup>越前椿のとひ入御茶入<sup>ならし</sup>者  
ほんたて御茶碗和泉守上りしわりかうたひの御茶碗也さ  
て御茶たち候て 將軍様<sup>江</sup>被進候を御辞退被成候故

お国様上則御直<sup>二</sup>將軍様<sup>江</sup>被進候それを紀伊殿御頂戴

それを駿河殿まいりそれを水戸殿まいり藤堂和泉守被下候

御茶碗中納言御取 御前をうかかひ御上被成候得<sup>ハ</sup>御前よ

り紀伊殿駿河殿御覽し水戸殿又御前をうかかひ候得<sup>者</sup>

御氣色にかり候由御茶碗御持御立將軍様<sup>江</sup>御上候得<sup>者</sup>御

請取被成 お国様<sup>江</sup>被進さて御茶入御出し被成候得<sup>者</sup>

將軍様御時過候<sup>二</sup>御取御覽被成次第に拝見又水戸殿將

軍様御前をうかかひ將軍様へ御上候へ<sup>ハ</sup>御請取被成もとの座

に御なをし被成候御茶入おさまり候て以後お国様<sup>甲</sup>つんとさ

りのふくへに御炭を御もち候て出御被成御炭を御直被成候さ

て御くさりの間へ將軍様出御いづれも御伴被成候御床の御

かさりを拝見し候得との御意にて御三人御床さわまで御よ

り候て御かさり御覽被成候御菓子榎柑出候銘々に御頂戴し

はらく御能被成候御うす茶出御前へも銘々にまいり候それ

より還御水戸殿御先へ御立御敷寄屋へ御草履御なをし被

成候還御之跡より紀伊殿駿河殿水戸殿御本丸<sup>江</sup>御礼<sup>二</sup>御上

候得<sup>者</sup> 將軍様西丸へ御礼<sup>二</sup>出御被成候にくろかね御門

にて御目得被成候將軍様御跡より西丸へ御礼<sup>二</sup>御裏門

より被致候<sup>御</sup>御目見得被成候<sup>御</sup>御帰り

一 廿日 御具足之御祝御連歌 昌琢

一 松に之無八百萬代の春の色 昌琢

一 かさしの梅の立枝そふ庭 御

一 朝朗衣手かすむ●とひて 玄仲

一 廿二日松下左助二本松より同国田村三春<sup>二</sup>所替被仰付<sup>三</sup>万

二月大樹河越渡御二十日計御逗留鹿氣御遊美尾屋桜花

上覧

二月六十三日お国様御本丸江被為成候御相伴紀伊殿駿河殿水戸殿へ十一日御上使有之

同日十二日天氣能目出度由御申紀伊殿水戸殿御本丸江御登城候得者駿河殿も御坐候て御三人御一同御年寄衆へ被仰置御帰西丸江も紀伊殿水戸殿御越御年寄衆へ被仰置十三日に夜の八ツ半御支度被成七ツ少過紀伊殿水戸殿大手より御登城候て殿上之間も御坐候てしはらく御待被成候処駿河殿御越御一所に御入候夜の引明に 將軍様西の九へ御迎出御殿上之間の御縁かはへ御三人御出御目見●

の仕 相 お国様御越被成候 將軍様へくろかね御門迄又御迎出御三人へ御玄関の御白洲へ御出候 伺公 お国様御廣間通御成被成候御三人御直御白書院より御露地口へ御坐候御伴被成候御数寄屋へ御入被成候にちりあがりの戸を御水戸殿御しめ候御草履へ初中後御腰物持たる人なをし申候

御かけ物 一 御かま 御成之前ぬ畳之御つふ御拝領即御床 御かさり被成候御炭過御膳出さて御中立之時紀伊殿水戸殿戸をあけて御先へ御立被成候はんと被成候得者御草履なをし候て御坐候ゆへ跡へ御しさり候さてそれより御供被成各々御出お国様御腰かける御坐候御三人ながら御前伺公しはし御咄御坐候 お国様御せうやうに御立被成候間にくくりの戸御あけ候て三人ながら外露地へ御出候さて御手水御つかひ御数寄屋 入御之時御供被成候御坐御居かわり被成候御花入 蠶之一声御花 御所望よりお国様被遊候黄梅花一

枝御入被成候てさて御茶たち候て御直 お国様御請取被成候 將軍様にとの御氣色御坐候つれ共紀伊殿へ御渡被成候紀伊殿御請取藤堂和泉守御挨拶して將軍様御上候其内 將軍様御手前々したみの時分に罷成候お国様御氣色にのりしつる 將軍様被召上それより紀伊殿頂戴駿河殿水戸殿まいり藤堂和泉守被下候御茶碗水戸殿御請取水戸殿御請取御前をかかひお国様御上茶碗々に夜見和水守所より又水戸殿御請取 お国様御前を御うかかひ候へたきかたになをし候得との御氣色により水戸殿直し被

成候

御茶碗 御茶入 お国様御一覽被遊順々に拜見御前も御うかかひ水戸殿お国様御上候へ者 お国様御なかし被成候後の御炭御釜迄將軍様御あけ候 御なくさきその御挨拶によりお国様被遊候さて御くさりの間御覽御坐之間へ御成候御三人御坊主部屋へ御はいり候 御長袴めしさて御能御見物お国様御坐の御坐敷御次の間にて御三人計御見物お国様御坐之御座敷御次の間にて御三人計御見物三番目芭蕉初時將軍様より雅樂頭大炊頭兩人も御使者にて御三を御黒書院へめし御酒被進二献まではめんめんにてまいり三献のに御盃の臺出御三人ながら御盃御頂戴其盃何も御前へ被召上其盃藤堂和泉守に被下納それより御能御見物四番目自然居士候て御膳上御坐者間御三人なからめし候て御相伴初献二献へ御めんめんの御盃にてまいり三献目に お国様御盃御三人ながら御頂戴御肴を御三人ながら將軍様被進候て御三人の盃何もお国様被召上御盃藤堂和泉守被下納御能過還御御三人御白書院近き道を御先江御越御玄関の御白洲に伺公御目見得將軍様西の丸御礼し出御被成御三人之御跡に御つき候て西の丸御裏門通し御越お国様へ御目見得被成それより御本丸へ御越御年寄衆に被仰置御帰

二月十九日大御所様より岡田兵部御しかり被成阿倍備中守御預岩付へ配流御咎之儀 同廿八日徳永左馬助同下総守父子公事をいたし及對決父子共御改易被仰付日来父子不和て下総及長年迄不令隠居父へ国計罷在 神君御他界以後煩之由申候て今年迄終不被下然子下総色々親父不足御坐候得共不及是非罷通候処去年御堀普請被仰付候時余の大名何も普請出来仕候得共下総下場計一圖出来不申候て 公儀より御とかめ御坐候時下総いまた家督取不申部屋住にて手前不自由之由申扱又父之儀とも不儀之由申上候間左馬助被召下條々不届御坐候付父子共流罪被仰付父左馬助 酒井宮内御預後戸沢右京御預子下総守溝口伯耆守御預越後へ配流同日別所豊後守御改易是も 神君御他界以後煩之由

身不罷下子息軍平を江戸に指置知行所にて鷹野川狩計て罷有候事是公事無御坐候得共右之次第被罷下御穿鑿より兵法新當流の名人其上穴沢流之長刀を令相傳無双之驚人程の事也然共心不足有之如此 右兩人之領所濃州丹州国制之儀可申付由為上使松平右衛門大夫被遣五味余一右衛門被相添 三月酒井謙政守忠勝於江城郭牛鹿村賜別墅

三月小 四日 大御所様紀伊大納言殿へ御成御相伴水戸中納言殿立花飛騨守也四日之朝夜之しらしら明に水戸殿御出被成露地口より御入被成堂御待日の出 お国様被成候堂の前前かや門の内御目見得すきや江人御被成候時くりにちりあかりの戸も水戸殿御しめ被成御中立の時御草履中納言殿御なをし お国様御腰かけに御床之時水戸殿勝手にて手水御つかひ候てさてすきやへ入御之時御伴御花しけんしひかへ椿 お国様被遊花生 安藤帯刀ひらかたてほり出申候

御茶之次第 お国様あかり紀伊殿頂戴それを水戸殿まいりそれを藤堂和泉守被下それを立花飛騨守被下納茶碗飛騨守直紀伊殿へ渡申候茶入 お国様御一覽被遊皆も見被申 お国様御なをし候後御炭 お国様被遊候くさりの間出御の時御先へ水戸殿御出伺公さてくさりの間かさり御一覽の後御成書院へ出御 御前へ紀伊殿水戸殿をめし長袴御着かへ候て御出候ねまはしはやく被成御出被成候御能四番過於御成書院御膳上初献二献御めんめんのにてまいり三献目に養殊院殿より色々拝領忝とて臺の物御上候其臺の御盃にて相国様被召上御盃紀伊殿御頂戴之時御腰物拝領其盃御前へ被召上候時紀伊殿より御腰物御上候其御盃水戸殿頂戴其盃御前へ被召上其盃和泉守被下納御能過

還御被成何も忝との御礼に御登 城 三月十二日 將軍様伊達陸奥守所へ御成御作法別記有之 同十三日 酒井内記も歩行頭被仰付

同日水見新右衛門 御歩行頭被仰付

同日水見新右衛門 御歩行頭被仰付

同日水見新右衛門 御歩行頭被仰付

同日水見新右衛門 御歩行頭被仰付

一 十四日 將軍様紀伊大納言殿へ御成前十三日内藤伊賀守為

上使駿河殿水戸殿<sup>正</sup>可為御相伴由被仰下即御向所上使と同道  
被成御礼<sup>二</sup>御登城御礼被仰上十四日夜明少前<sup>三</sup>駿河殿水戸殿

御一所<sup>二</sup>とうこの間<sup>三</sup>御待の時分<sup>四</sup>外露地堂の前<sup>五</sup>御坐候て  
將軍様教寄屋<sup>二</sup>入御之時供奉御中立の時駿河殿水戸殿も

勝手へ御越手水御つかひ教寄屋へ入御之時供奉御茶の次第  
將軍様上それを紀伊殿頂戴それを駿河殿まいりそれを水

戸殿まいり藤室和泉守<sup>二</sup>被下それを丹羽五郎左衛門被下納茶  
入之取次五郎左衛門御花後之御炭 將軍様被遊候それより

くさりの間へ出御かさり御覽於御成書院金子御服紀伊殿へ<sup>三</sup>押  
領さて御能初御能四番過御成書院にて御膳上り候初献二献の

御手前の御盃三献め養珠院殿上り御上候て臺にて  
將軍様被召上御盃紀伊殿御頂戴之時御道具御拝領其盃御

前へ被召上候時紀伊殿より御道具御進上其盃駿河殿御頂戴  
其盃御前へあかり御盃水戸殿御頂戴其盃御前へあかり御盃

藤室和泉守被下納還御之時水戸殿 御成書院の椽にて御目  
見得それより御先<sup>二</sup>御かけぬけ候て露地口<sup>三</sup>にて又御目見得そ

れより駿河殿紀伊殿御同道御本丸へ御礼に御登 城御目見得  
さて西の丸へ御越候得<sup>三</sup>堂嶋刑部罷出御年寄衆は御前<sup>四</sup>江<sup>御</sup>め

し之由申<sup>二</sup>付刑部<sup>三</sup>被仰置  
一 三月十八日 お国様駿河殿へ御成紀伊殿水戸殿十五日御礼<sup>二</sup>

西の丸へ御登城候得<sup>三</sup>供奉可被成由被仰付  
同十七日御宮へ御参候後供奉忝由御礼<sup>二</sup>西の丸御本丸へ御登城

十八日七ツ半<sup>二</sup>紀伊殿水戸殿露地口へ御越候得 駿河殿西の  
丸へ御迎<sup>三</sup>御坐候て御帰<sup>四</sup>御逢御同道<sup>五</sup>外露地<sup>江</sup>御はいり候て

堂に御待 <sup>お</sup>お国様日の出に御成被成候堂の前にて御目見得さ  
て教寄屋へ入御之時御相伴御中立之時紀伊殿水戸殿御越手

水御つかひ被成候 御茶之次第  
お国様被召上紀伊殿へ被進候を駿河殿へ御時過て紀伊殿御頂

戴それを水戸殿御取次駿河殿へ被進候それを水戸殿まいり  
藤室和泉守<sup>二</sup>被下それを丹羽五郎左衛門被下納御花後也

御炭 <sup>お</sup>お国様被遊候駿河殿御寝間せんすいの間へ出御被成  
駿河殿御拝領物有之其以後御能初四番過せんすいの間<sup>二</sup>て

御膳上初献二献御手前也御盃三献めに御盃紀伊殿御頂戴

其盃御前へあかり御盃駿河殿御頂戴其盃御前へ上候時駿河

殿上り候御馬御進上其盃水戸殿御頂戴其盃御前へ上御盃藤室  
和泉守被下納御盃御頂戴之時御三人<sup>江</sup>御看を <sup>お</sup>お国様被下候

御能過還御被成候還御之時水戸殿御成書院の椽か<sup>二</sup>わ<sup>三</sup>て  
御目見得御跡<sup>二</sup>付御先<sup>三</sup>御かけぬけ露地口へ御出向御目見得

それより御跡<sup>二</sup>御付西の丸へ御越紀伊殿水戸殿御一所に御  
礼御本丸へ御礼御越候はんと御申候得<sup>三</sup>御年寄衆御無

用と被申候故御登城無之  
三月廿四日 將軍様河越<sup>二</sup>御鷹野御成すどの谷にて御鹿

狩  
三月廿八日於西丸御慰の御能有之紀伊殿水戸殿其外御

家門御見物  
廿九日自河越還御但鴻の巣辺御鷹野御物教あり

卯月小三日 <sup>お</sup>お国様水戸殿へ御成候次第  
三日日の出 大御所様御成外露地も表へ中納言殿御出

御目見得又内露地のくくりのきわ<sup>二</sup>て御目見得御先へとの  
御詫にて御先へ御はいりさて御すきやへ出御御伴紀伊殿立

花飛驒守丹羽五郎左衛門藤室和泉守  
御掛物 <sup>五郎の戸</sup> 御茶入 <sup>ふんりん</sup>

御釜 <sup>うはくろ</sup> 御茶碗 <sup>あらし</sup>  
御花入 <sup>春福</sup> さしやく <sup>里休</sup>

御香箱 <sup>つゐ茶</sup> 水さし <sup>伊賀やき</sup>  
くさりの間のかさり

尾硯 <sup>草花水入かんの物</sup> 拾遺集 <sup>為廣御筆 四季巻</sup>  
くわんせう <sup>同じもく</sup> 尼か崎臺天目 <sup>物一</sup>

さるかま 中つき  
水さし <sup>はけめ</sup> とうこの間のかさり

御掛物 <sup>白金御筆</sup> 中央のしよく <sup>ししかふろ</sup>  
炭過御膳出御本御ニ水戸殿御膳仕御給仕御看も御中立御花むら

さきのうつきひかへ白木蓮花 <sup>お</sup>お国様被遊候  
御茶之次第

<sup>お</sup>お国様被召上紀伊殿頂戴中納言殿まいり立花飛驒守丹羽  
五郎左衛門藤室和泉守被下候後之御炭 <sup>お</sup>お国様被遊候御炭過

かよひ口を水戸殿御あけ被成書院候出御御太刀銀子水戸殿

拝領さて御能御見物御成書院の廣間の間の廊下戸袋の御所

<sup>二</sup>水戸殿家中之者とも御目見得仕候御能四番過於御成書  
院御かけはんの御膳上初献二献迄<sup>三</sup>御手前之御盃にてま

いり三献めに榮勝院殿御上之臺<sup>二</sup>て <sup>お</sup>お国様被召上御盃紀  
伊殿頂戴其盃御前へ上り御盃水戸殿頂戴其盃御前へ上時

水戸殿より御馬御進上御盃藤室和泉守被下納御能過還御  
即水戸殿西の丸御本丸へ御礼御登城

<sup>同</sup>六日 將軍様駿河殿へ御成前日水戸殿供奉可被成由為上  
使酒井讚岐守御越紀伊殿水戸殿御本丸西の丸へ御礼<sup>二</sup>御登城

御成之由作法 <sup>お</sup>お国様と同前  
同九日 將軍様水戸殿へ御成卯月六日駿河殿へ

御成之供奉可被成五日被仰出候御礼<sup>二</sup>紀伊殿水戸殿  
御登 城候得<sup>三</sup>九日<sup>四</sup>水戸殿<sup>五</sup>御成可被成旨被仰出候間御礼御

申上御帰 八日<sup>二</sup>御成候段 との御礼御本丸西の丸へ御登  
城九日日の出に 將軍様御成外露地の表へ水戸殿御出同公

被成御目見得それより内露地くくりのきわ<sup>二</sup>伺公被成御目見得  
御先<sup>三</sup>との御詫<sup>四</sup>御先へ御はいりさて教寄屋へ入御御伴紀伊

殿駿河殿立花飛驒守藤室和泉守炭過御膳出本御ニ御看水  
戸殿御給仕御中立御花 將軍様被遊候

御茶之次第  
將軍様被召上それを紀伊殿頂戴駿河殿まいり水戸殿まい

りそれを順々御相伴衆被下納後炭 將軍様被遊候御炭  
過かよひ口中納言御あけ被成御成書院へ出御御給銀子水

戸殿御頂戴それより能御見物御成書院と廣間との間廊下戸  
袋の所 <sup>二</sup>水戸殿家中の者共御目見得御能四番過御成書

院にて御膳上御かけ盤初ニ<sup>三</sup>手前三献めに榮勝院殿より  
上りし臺 <sup>二</sup>將軍様被召上御盃紀伊殿頂戴其盃御前

へ上御盃駿河殿頂戴其盃御前へ上り御盃水戸殿頂戴其盃  
御前上自水戸殿御馬被進上其盃藤室和泉守被下納御

能過還御則水戸殿御礼<sup>二</sup>西の丸御本丸<sup>三</sup>御登城  
十日朝倉織部御歩行頭被 <sup>仰</sup> <sup>松平新五郎殿</sup>

東照宮第十三回忌於日光山被行法會酒井忠勝監焉  
同十三日 大御所様日光山へ御参詣同十六日光<sup>江</sup>御着

十七日御祭礼神考御参詣有

一条右大臣兼退三條大納言実條中院大納言通村妙法院  
門跡青蓮院門跡梶井門跡并女院使

參詣 同十八日も御參詣廿一日還御

同十六日自公方様三浦志摩守御機嫌御うかかいの上使  
アリ

一 廿五日當將軍様日光へ御參詣 同廿八日日光山御立  
五月大朔日江戸へ還御

一 五月十一日 大御所様御母堂法大院殿廿三年之御遠忌當  
り候<sup>二</sup>付彼御菩提所駿河之府中法大院<sup>三</sup>而<sup>四</sup>御法事有之  
松平大隅守為上使參詣奉行之

一 五月十八日大雨辰の刻大地震是より霖雨

一 公方様御不例 ● 為御見舞諸大名登城戸庵御茶  
奉献無程御快氣

一 六月小十一日 お国様尾張殿へ御成前日<sup>二</sup>御成可被成との上  
使尾張殿へあり為御礼尾張殿へ御登城に御同道にて紀伊殿  
水戸殿も御出仕候得<sup>者</sup>紀伊殿水戸殿も供奉可成旨御直<sup>二</sup>被  
仰下候則御礼申上御本丸<sup>二</sup>御三人ながら御礼<sup>三</sup>御越十一日夜の  
しらしら明に紀伊殿水戸殿御同道露地口より御はいり堂<sup>二</sup>  
御待日の出に お国様御成堂の前<sup>三</sup>而<sup>四</sup>御目見得被成教寄  
屋へ入御之時供奉御中立の時紀伊殿水戸殿もわきにて手  
水御つかいひさて御供教寄屋へ御入 御茶之次第

お国様被召上尾張殿頂戴それを紀伊殿まいり水戸殿ま  
いり御相伴衆被下おさまる御茶入 お国様御一覽皆々拝  
見御前之上 お国様御なをし被成後之御炭御花 お国様  
あそはされ候御成書院へ出御其以後御能御見物四番過於  
御書院御膳上初献二献御手前三献のも 相慈院殿御上候  
臺にて お国様被召上御盃尾張殿頂戴之時御腰物御拝領  
其盃御前へ上候時自尾張殿御脇指御進上候て御盃紀伊殿  
頂戴御肴被進其盃御前へ上御盃水戸殿頂戴御肴被進其  
盃 御前へ上御盃藤堂和泉守被下納御能見物 出御御能過  
還御之時御成書院の縁かはにて御目見得それより御跡<sup>二</sup>  
かつき御先御かけぬけ露地口にて又御目見得還御以後  
御三人西の丸へ御礼<sup>三</sup>御登城御目見得御本丸へ御越御目見

得無之  
六月十四日晚自京都申来今月十一日皇太子親王御他界  
之由

一 七月八日大坂御城加番衆脇坂主水戸田稻葉丹羽式部内藤  
帶刀被下御暇御帷子御單物拝領

一 七月小十一日午刻大地震あり御城石垣方々崩足利学校寒  
松物語<sup>二</sup>被申候<sup>三</sup>廿三年前以前伏見<sup>二</sup>而<sup>四</sup>今日大地震あり廿三  
年以前<sup>二</sup>も今日大地震今年又如此之物語也

一 八月九日 將軍様尾張殿へ御成水戸殿へ前日供奉可被  
成との為御上使内藤伊賀守御越則御礼御登 城九日夜七  
半<sup>二</sup>御支度夜の引明<sup>三</sup>御越露地口より御はいり候て堂に御待  
日の出に將軍様御成堂の前にて御目見得教寄屋へ入御之  
時御伴御中立之時水戸殿脇にて手水御つかひ教寄屋へ入  
御之時御供被成御はいり勝手口より藤堂和泉守罷出候て  
御相伴仕

御茶之次第

將軍様被召上尾張殿頂戴水戸殿まいり藤堂和泉守被下立  
花飛驒守被下納御茶入 將軍様上覽皆々見申候て御茶入  
飛驒守御前へ上 將軍様御なし被成候御花後之御炭  
將軍様被遊候御成書院へ出御其以後廣間へ御成御能御見物  
四番過御膳上初献二献御手前三献のに相慈院殿より上候  
臺にて 將軍様被召上自尾張殿御腰物御進上其御盃尾  
張殿頂戴御腰物御拝領其御盃御前<sup>二</sup>上御盃水戸殿頂戴  
御肴拝領其盃御前<sup>二</sup>被召上御盃藤堂和泉守被下納御能  
過還御尾張殿水戸殿御同道被成御礼<sup>三</sup>向御城へ御登城  
御目見得  
八月十日未刻於西の丸殿中井上主計頭<sup>二</sup>日頃意恨有之  
より御横目豊嶋刑部少輔主計頭を致生害候<sup>二</sup>付て殿中  
之外強動青木久左衛門刑部少輔を組留突大勢抱寄つき刑  
部少輔も其座にて死翌日早朝刑部子息主膳御成敗<sup>十二</sup>  
青木久左衛門刑部を 組留候得共深手負令死去  
九月小五日鳥居左京忠政病死<sup>六十二</sup>  
同十二日山口修理父子天野對馬守兄弟大久保右京同主膳  
御勘道御免許被成今日何も出仕兩上様へ御目見得

一 十四日於西の丸御口切之御教寄 將軍様出御被成尾張  
殿水戸殿供奉可被成との御上使永井信濃守前日十三日御越  
則御礼<sup>二</sup>尾張殿水戸殿西の丸へ御登城十四日夜七時尾張殿

水戸殿西の丸へ御登城大手橋より内御門櫓の御門の下大  
番衆の番所に御待六ッ過<sup>二</sup> 將軍様出御被成尾張殿水  
戸殿御伴被成御しきや外露地の堂に御待被成永井信濃守  
御迎<sup>二</sup>罷出御すきやへ入御信濃守にちりあがりの戸を明  
御草履をなをす

一 御掛物 さひわら<sup>一</sup>山讃

一 御茶入 かんざ

一 御釜 織部<sup>かま</sup>

御懸物御置令御覽候得との御詫にて尾張殿水戸殿拝見  
被成候御膳出御酒<sup>二</sup>篇目に お国様御御茶たて口より出御  
何を酒<sup>も</sup>まいり候様々と御しむ被成候其以後御湯出御中立之  
時御草履内藤外記へまはりみてなをし申候少の間御腰かけ  
<sup>二</sup>御坐候尾張殿水戸殿御前<sup>三</sup>伺公 將軍様外露地の  
堂へ出御被成候くつろけ御兩人へ外露地内露地との間に  
御入手水御つかひとうなり御教寄屋へ入御御草履外記  
なをし申候御坐御いりはり被成候御花<sup>二</sup>あかきげひかへ  
し玉御茶たち候て

將軍様へ被進候を御したひあそはされ候間 お国様被召上  
御直<sup>二</sup> 將軍様へ被進候 將軍様御頂戴被遊尾張殿頂  
戴それを水戸殿まいり藤堂和泉守被下納御茶碗水戸殿御  
取御前をうかかい御前へ御上候得<sup>者</sup> 將軍様御上覽被成尾  
張殿へ被進尾張殿拝見被成水戸殿拝見被成又御前を御う  
かかひ候得<sup>者</sup> 水戸殿御なをし候へも御詫御茶碗水戸殿御な  
をし御茶入御出候へ<sup>者</sup> 將軍様御時宣被遊御一覽次第

次<sup>二</sup>拝見被成又水戸殿御前を御うかかひ候へ<sup>者</sup> 尾張殿  
へ御なをし候へとの御詫にて尾張殿御なをし御茶入之由  
以後 お国様<sup>相</sup>ふくへに御炭御持出御被成御炭被遊御くさ  
りの間へ 將軍様出御被成御は<sup>二</sup>さり御覽尾張殿水戸殿  
にも御床の御かさり御覽候へ<sup>者</sup> 御詫にて御床さきわ迄御兩人  
御越拝見本座<sup>三</sup>伺公御菓子出御兩人も頂戴被成しはし  
御なをし御坐被成御うす茶出御前へも上皆々まいり候其  
以後還御御跡より御兩人御本丸へ御礼<sup>三</sup>御越 將軍様西

の丸へ御礼に出御の御跡より御兩人御越御裏御門より御はいり お国様へ御目見得被成御帰

一 九月廿六日 お国様御本丸へ御成尾張殿水戸殿へ廿一日供奉可成との上使永井信濃守御越則水戸殿尾張殿御礼に御登城御目見得それより御本丸へ御登城御目見得御成

の前日廿五日四つ時御兩人御礼に御登城西の丸にて御目見得御本丸にて御目見得なし廿六日夜七つに御支度七つ

過尾張殿水戸殿御登城殿上之間殿上御坐候て御待夜のひき明に 將軍様西の丸へ御迎に出御殿上之間の御縁かわへ御兩人御出御目見得日の出 お国様御成又

將軍様くろかね御門迄御出御兩人へ御玄關の白洲に伺公御目見得 お国様御廣間通御成御兩人へ御成書院なり露地口へ御坐御敷寄屋へ入御之時供奉御せうり立花飛騨守なをし申候御炭過御膳出御中立之時尾張殿水戸殿御前伺公飛騨守も罷出御雑談御坐候 お国様御手水御つかい候以後尾張殿水戸殿脇にて手水御つかひ御すきやへ入御之時供奉御

御居替被成御花入鷲の一声御花御所望により お国様被遊梅のをくなる桃花やさて御茶たて候と尾張殿御立かよひ被成候 お国様御あけ候被召上候て尾張殿へ御渡尾張殿御請取 將軍様へ御上其内 將軍様御手前御しまひ

よき時分罷成申候 將軍様上尾張殿頂戴水戸殿まいり藤堂和泉守立花飛騨守被下納御茶碗飛騨守御前上御茶入お国様御一覽さて順々に拜見飛騨守御前へ上候得 お国様御なをし被成候さて後の炭御釜過 將軍様御上被成候御なくさしとの儀にてお国様被遊候扱くさりの間へ出御御兩人へ御勝手口より御まはり供奉御くさりの間御一覽 お国様へ御坐の間へ入御尾張殿水戸殿へ御白書院の際に伊丹播磨守屏風江引まはし置申其内にて長袴めし兩人御坐之間へ御めし御能御見物 お国様御坐の御

次の間にて尾張殿水戸殿御覽候御能四番道成寺過御膳上御座之間へ尾張殿水戸殿御めし候て御相伴初献二献御手前三献目に お国様御盃 將軍様御頂戴其御盃 お国様被召上其御盃尾張殿頂戴御肴 將軍様へ被進候其盃 お国様被召上御盃水戸殿頂戴御肴將軍様へ被進候其盃

お国様被召上御盃藤堂和泉守被下納御能過 還御尾張殿水戸殿御 書院近き道を御先へ御越御玄關の御白洲に伺公御目見得 將軍様西の丸へ御礼に出御の御跡につき西の丸御裏御門通し尾張殿水戸殿へ御坐候 お国様へ御目見得 御本丸に御越御礼御年來被分仰学候

一 十月大 二日 大御所様鴻巣江為御鷹狩出御自公方様

一 以三浦志摩守御肴進上同八日還御

一 十月十一日青山大藏大輔奉行職被仰付

一 當月七日大坂の町奉行嶋田越前守頓死 五十一説自害之由子細を不知

一 十一月大 二日 三浦志摩守上州にて三千石御加増拜領

一 十一月六日夜戌刻西の丸に御番衆奈良村孫九郎と申人相番鈴木久右衛門木造三郎左衛門兩人意趣にて切かかり申候兩人手負令敗北倉橋惣三郎と申者相手無之候得 共中へ入深手當坐相果し曾我又左衛門孫九郎をくしとめ申候夜中燈をふみけし殊之外殿中強動諸人多以馳參候

一 鈴木木造元來奈良村をあなとり堪忍難成候へ共相手二人御坐候間一所打果し可申と存相待候処 今夕すてに夜請過申候時又慮外之儀候間孫九郎是をとかめ切かかり申候此節相番衆皆以小脇指相口にてつきとめ可申外無之候孫九郎心かけ日暮時分より大脇指をつつらより出し指かへ罷在候間何も刀手遠置小脇指し計むかい夜中の事なれ大脇指にて切たてられ難義不及是非其後火をたて事静り候て源九郎永井信濃守に御預被成十一月十三日於信濃守所切腹被仰付二十四才信濃守家來鈴木長作介錯之孫九郎辞世

廿あまり四ふゆ之寒の飛鳥川  
誰我が跡のなきをとままし

一 其頃歌人の聞へありし信濃守内佐賀和田喜六か奈良村追善之詠歌

一 去し六日の夜戌の時はかりにしのみたちにはさくこと

いてきぬとて世の中ゆつりて人はしりあつまる馬のはせちかふをとおとろしけれ 我を打すてかけいつみ

れはにしひろしついまつおほく北南人のとよむといふへくもあらずこなたかなたの見ると出さし可ためつ其前にん

のたちこみたるいさしむるら竹の林にいるかことしきはれ何事にやとへはあるいしらすといふもありあるはそれかし

いつることになどののしるもあり更にころもうつつならすいかにかにといふ折しも此なき人の名をいひののしりてこれかみたちをきれり何かたもしれすなめしと

とめおきぬといふむねうちさはきて猶たしかにときけはいやたかはす此人也やありてものかきかきせていてゆくをはしりよりみればなりなりけり猶あやしめて

それかあらぬかうたるわしき折しも声打きけはまかふへくもあらずおりにかなしきさもあわれさもこれをなん身のはしめにうをほゆるかやうの人にはたやすくだいめんもありかたき事なれ共よからぬ身にも幸といふものありてわかつたのしかよふ所のあつかりなれはいとこころやすく其夜よりかたはらさしていたはり

つかふまつるとかなしき事いはんかたなし此もつ事あらはあめか下しらぬはなし今更に書あたはすへきにもあらず扱も草の鶏をあわせ竹の馬にのりしころをひより見馴し人なれはいつ忘るへくもあらず此三とせ計のあな

たよりやまひつきて此頃はいとよはよはみへしかは猶さりならぬ中とて朝たつね夕とふらいおこたることなしさるは

花の春もみちの秋あわれをくらす大和歌も心を入れてほたるをあつめ枝の雪をならして難波津のもくつをかきあつめ浅香山の落葉をひろひ取てゆへある歌なとつかふまつられし行衛とてをなし月の十日三尺の所に身を相ふる時にも筆の海のかき心さしを見て廿あまりのと言歌読り忘形見にもおもひとめてもてり是ななく

恨をむくいし人もおほくはたちまさらしかくも市にさ

らして姓名を尋し人にもいかてか立おくれんそれはみ

なおのれをしるもののためにしわきこれは身つからのう

らみをむくはんとてかなしきおやあわれなるはらからを

も忘ぬあこまかにいひもてゆかは筆のいとまなからんいけ

らはおのれをしるものためになと忘れなさらんおほ

やけをおしはかりおもふに人もおし人もうらめしとは

かかる事にやありけんかくかなしきうちにおよひをね

むらして見ればけふ七日になりぬ誰わか跡のと書置

し筆のあととひてみればよしのの瀧はけにも神立のな

りける様いささかなる心さしを拂にくやうしたてまつる

和歌のうらなみ立ても居ても忘かたき悲しきをむ津

島のひかりをよすかにうきあらはさはくらきよりくらき

道のたよりもなとかならさらやも

南 夏さひしわか身ならずは大形の

よのことはりにきかましものを

無 むら村雨定なき世のならひをも

阿 あわれてふことのみ怪て世の人の

同廿八日諸大夫被仰付 永井右京朝倉織部

定

於御城中自然火事其外いかやうの儀免有之御錠の外一

切不可致参上事

於御城火事喧嘩口論等有之時常々御番勤仕候輩又

不断相詰候面々計可定城物頭之寄に番衆番組之衆

兼て約束之所迄相詰候様可有之但路次之儀不可急

右之地一まとひに罷在其上御前衆より下知したひ可参

事

於御城中自然火事其外如何様之儀有之共常々御前

相詰候面々又御目付之外一切奥不可参事

奥にて自然火事有之時御側衆差圖を以御目付衆御

使番衆奥江可参事

於御城中火事又如何様の儀有之と云共奥相詰候て

罷在候輩御使番計在之候間御番衆番所然る可有

之其外之御番衆も番頭衆御目付衆差圖可随事

右可相守此旨者也

寛永五年十一月 日

江城年録 四

寛永六年己巳正月

朔日連枝御家門御礼次御譜代大名衆御礼也 公方様六ッ

半西丸へ為御礼御出還御之後御祝初

初献御盃水戸殿御頂戴御前上御盃備前宰相納

二献御盃水戸殿駿河殿御頂戴御前上御盃備前宰相納

三献御盃駿河殿水戸殿盃備前宰相納

同日西丸へ御連枝御礼六ッ半 御盃次第

初献御盃水戸殿御前上御盃備前宰相納

二献御盃水戸殿備前宰相納

三献御盃一献の時に同

同日之晚於御本丸御誦初暮六ッ半 初御盃之次第

初献御盃駿河殿御前上水戸殿盃通

二献御盃水戸殿御前上御盃駿河殿盃通

三献御盃駿河殿御前上御盃水戸殿盃通

残御作法如去年

四日代官衆御礼

五日於西丸酒井和泉守本多美作守為諸大夫

六日寺社方御礼

廿日御具足之祝御連歌有

かきりなき月日やためし松の春 昌琢

風もおさまりかすむ大空 御

帰るさそう波路の船出して 玄仲

正月三日江戸御城惣外曲輪御堀石垣諸大名被仰付右之

石垣坪都合四万四千五百三拾三坪式合八勺三才

御普請組之次第

一組 酒井雅樂頭 酒井阿波守 西尾右京

細川玄蕃頭 真田伊豆守 同 河内守

同 内記 同 隼人

式拾万八千三百石

一組 土井大炊頭 堀 美作守 佐久間日向守

同 大膳 本多大隅 松平五郎

同 采女 浅野采女

式拾貳万八千八百石

廿七日 大御所様御鷹野出御

十二月大 五日 江戸還御

十一月十六日渡辺半兵衛荒川又六郎道奉行被仰付

山口修理亮御奏者番被仰付

佐久間備前守跡孫日向守に被仰付又曾我又左衛門御

加増三百石拝領奈良村喧嘩之時首尾の御坐候付如此

廿七日 大御所様御鷹野出御

十二月大 五日 江戸還御

一組 酒井讚岐守 安藤右京 稲葉丹後守

井伊兵部少輔 酒井山城守 内藤伊賀守

新庄駿河守

〱拾七万四千四百石

一組 永井信濃守 土屋民部少輔 秋元但馬守

水野左近 井上河内守 青山大藏

内藤百助 京極主膳 小笠原左衛門佐

〱拾貳万六千石

一組 松平式部大輔 水谷伊勢守 西郷若狭守

秋田河内守 牧野右馬允 松平大膳

日根野織部 皆川志摩守

〱拾六万九千九百五拾石

一組 奥平美作守 内藤左馬助 大関右衛門

那須美作守 土方彦三郎 大久保加賀守

相馬長門守

〱貳拾四万三千貳百拾石

寄合組 仙臺中納言 上杉弾正 鳥居伊賀

佐竹右京大夫 岩城忠次郎 仙千代殿

酒井宮内少輔 酒井長門守 酒井右近

堀 丹後守 松本伊豫守 同 出羽守

同 大和守 同 土佐守 本多飛騨守

水戸中納言 加藤肥後守 浅野但馬守

溝口出雲守 同 伊豆守 南部信濃守

戸沢右京 六郷兵庫頭

以上

一 江戸石奉行かり 久永源兵衛 森川金右衛門

駒井二郎左衛門かり 池田図書 小俣吉左衛門

石野六左衛門本右奉行 中嶋長三郎 天野麦右衛門

伊豆之石奉行かり 佐藤勘右衛門 大久保新八

長崎半左衛門 中沢主税 小倉忠右衛門

伊豆之船奉行 向井将監 石川八左衛門

今村傳四郎

一本目之栗石奉行 間宮虎之助 青木太兵衛

山田市兵衛

安房上総之栗石奉行 小濱右京 石川与次右衛門

岩田五左衛門

一 三河大名之内本役八人半役四人

一 遠州衆之内本役老人半役老人

一 伊勢衆之内本役老人半役老人

一 播磨衆備後衆本役也

一 五畿内衆 半役

一 近江衆本役

一 美濃衆本役 又本役之分

一 六拾老万九千五百石

一 内 拾万石堀分引但二条御普請先例也

一 内 老万六千石若木曾定役引

一 五拾五万五千石

一 内 拾万石被引但二条御普請之先例也

一 五拾五万石

一 内 拾万石若尾州紀州之例御免

一 本高三百四拾貳万四千三百九拾六石六斗

一 内 三拾万九千四百五拾石半役引

一 内 老万千石御番役引

一 三拾三万三千石色々引

一 正月廿四日相国様御本丸へ御成可被成由前駿河殿水戸殿

殿御相伴之由以内藤伊賀守被仰付之間御両殿則御礼御

登城之処ニ廿八日迄御延引廿八日七ツ半ニ御両人御登城

被成殿上之間ニ御待夜の引明ニ公方様西丸江御迎ニ御

出殿上之御縁かわにて御目見日の出の前ニ被為成時 将

軍様鐵御門迄出御駿河殿水戸殿者御玄關の御白砂ニ御伺

公被成御目見 相国様御廣間通被成駿河殿水戸殿へ御小書

院より御露地口江御座候て御数寄屋へ入御之時御伴

一 御かけ物もくりん 一 御茶入れなげつきん

一 御釜織部口の廣 一 花入かねのつづ

一 御茶碗わりかうたい 一 御水さしまほしはし

一 御中立之時御草履駿河殿御なをし駿河殿御先江御まへり

候と一度に水戸殿も御座候て手水御つかいニ御腰かけ

へ御両人なから御めしにつき御座候て御伺公御咄御坐候

御数寄屋へ入御之時御伴御花ハ桃のひかへしらむほひか

へ観音寺椿 相国様被遊候 御茶之次第 相国様被召上

それを 将軍様御頂戴それを駿河殿頂戴水戸殿まいり藤

堂和泉守立花飛騨守被下納萬御取次立花飛騨守後の御炭

相国様被遊候さて御座の間江出御あり三献の御いわひ

一 初献に御盃 相国様御初御盃 将軍様御頂戴其盃相国様

被召上御盃駿河殿頂戴其盃 相国様被召上水戸殿頂戴其

盃 相国様上り御盃藤堂和泉守被下納

二献ひきの物御盃 将軍様御初其御盃を 相国様被召上

御盃 将軍様御頂戴其御盃駿河殿頂戴其盃水戸殿まいり

其盃藤堂和泉守被下

三献御炭物山のいもに御盃 相国様御初御盃 将軍様御頂

戴其御盃駿河殿頂戴其盃 将軍様被召上御盃水戸殿頂

戴其盃 将軍様被召上御盃和泉守被下納御能御見物四番

過候て御膳上初献二献御手前三献相国様御初御盃将軍様

御頂戴其御盃 相国様上御盃駿河殿頂戴御肴 将軍様

被進其御盃 相国様上り御盃水戸殿御頂戴御肴 将軍様

被進其御盃 相国様被召上御盃和泉守被下納 御能過候て

還御 西丸へ将軍様御礼ニ出御駿河殿水戸殿も御跡に御

つき候て御越 相国様へ御目見

一 二月十三日 西丸様北の丸へ御成御相伴水戸殿立花飛騨

守也御相伴衆ハッ前ニ御出外露地にて御目見御数寄屋へ

入御之時御供にて御入御中立御花あかぶけひかへしらた

ま 相国様被遊候

御茶之次第 相国様被召上水戸殿御取次候て駿河殿へ被

進さて水戸殿まいり和泉守被下それを立花飛騨守被下万

の御取次をは立花飛騨守仕候後の御炭 相国様被遊候此

已後前々のごとく御能五番過御膳上初二御手前 三献御盃

駿河殿頂戴其盃御前へ上時自駿河殿御馬御進上御盃水戸

殿頂戴其御盃御前ニ上り御盃藤堂和泉守被下納御能過還

御

一 上野東叡山へ 御城の鬼門にあたり申候付而天海大僧正

と藤堂和泉守致相談達 上聞上野向の岡を轉して御宮を

建立し権現様を奉勸請御連枝何も諸堂御建立有て然とい

へとも終ニ相国様御參詣無之により天海大僧正頻りに申

上候ニ付巳ノ三月十五日ニ上野之御宮へ来十七日ニ御參

詣可被成由被仰出御相伴者駿河殿水戸殿也同十七日夜七ツ

過<sup>ニ</sup>駿河殿水戸殿上野之常行堂<sup>ニ</sup>御出御侍土井大炊頭永井信濃守何も長袴にて常行堂へ参候時日の出に 相国様御成堂の前<sup>ニ</sup>て駿河殿水戸殿御目見 相国様常行堂へ入御被成御見物<sup>此堂建立</sup> 扱法花堂へ入御被成御見物<sup>御建立</sup> それより輪花<sup>水戸殿御建立</sup>御見物それより御籠<sup>ニ</sup>間僧正寺へ入御御奥の小書院<sup>ニ</sup>而御膳上御相伴駿河殿水戸殿国師水戸殿の向に僧正

御盃の次第<sup>者</sup> 初献二献迄<sup>ハ</sup>御手前

三献の御盃僧正頂戴其盃和泉守被下納御膳過候て御次之間へ駿河殿水戸殿御くつろけ僧正寝間二階の小座敷の前の庭 相国様御覽被成駿河殿水戸殿も御見物御宮へ御参詣御宮より和泉守 寒松院へ御成御能初四番過かこいにて御茶あかり此時御半袴 相国様御次駿河殿其次水戸殿其次国師傳長老 御茶之次第

初献二献 御手前 三献御盃<sup>者</sup>藤堂和泉守被下納其外御盃なし和泉守沈酔仕候間笑雲御茶道仕候

御茶之次第

相国様被召上それを駿河殿頂戴それを水戸殿まいり天海僧正賜はり金地院国師のみ申候御茶過勝手へ入御被成御長袴をめしかへ勝手通表へ出御被成御能御見物御能過還

御 同十八日天海大僧正西丸へ昨日之御礼<sup>ニ</sup>登城其後本丸へも御礼被申上駿河殿水戸殿も両御所様へ御礼<sup>ニ</sup>御出国師藤堂和泉守も両殿様御礼被申上

一 巳ノ二月廿日於西丸御かこひ將軍様へ大御所様御茶被進之御相伴<sup>者</sup>駿河殿水戸殿夜七ツ過より御登城御對面所<sup>ニ</sup>駿河殿水戸殿御一所<sup>ニ</sup>御座候御侍夜の引明<sup>ニ</sup> 將軍様出御御かこひへ入御御伴

- 一 御かけ物 一休長文字 一 御茶入 織部せいたか
- 一 御花入 但かねのつづ 一 御茶碗 かみうら
- 一 御釜 織部釜但かた四筋 二筋有之 一 御みずさし ふるまき

御膳過御中立常のをし御花 白桃ひかへ越前本ひかへ観音寺椿

御茶之次第 相国様被召上 將軍様御頂戴それを駿河殿御頂戴水戸殿まいり藤堂和泉守立花飛騨守被下細萬御取

次飛騨守仕候 後の御炭過還御駿河殿水戸殿大番所御侍御礼被仰上それより御兩人御本丸<sup>江</sup>御越御礼被仰上御帰同二月下旬より 將軍様御痘瘡御煩御医者來何<sup>飛</sup>御痘瘡と不奉存熱氣御坐候<sup>ニ</sup>付醒し申候<sup>ニ</sup>付御痘瘡出かね御難儀

一 幼少之時分やふいも御煩被成候を実の御痘瘡と存御局<sup>井</sup>御かいしやくの上臈衆御痘瘡<sup>ニ</sup>て、御坐間問敷と申間御医者衆見立相違仕候由申候初<sup>者</sup>道琢久志本其後道安を被召寄御菓奉献上延寿院玄朔玄治相談にて御痘瘡も慥出諸人安堵仕候

一 尾張殿御在国<sup>ニ</sup>候得共御痘瘡之由御聞昼夜御急小田原迄御下向飯泉之弓削寺<sup>ニ</sup>被成御座御伺被早々御見舞可被成由 相国様依上意御参府御登城其後日々御見廻

一 閏二月初より公方様御氣分御快氣 同廿日御酒場

一 廿四日御祝之御振舞御能三月中御家門衆<sup>ニ</sup>御祝之御能有之

一 卯月十日西丸様御本丸へ御成駿河殿水戸殿御相伴自西丸様青山大藏御使自御本丸稲葉丹後守御使<sup>ニ</sup>而去八日<sup>ニ</sup>御兩人<sup>ニ</sup>被仰付御兩殿九日夜の七<sup>ツ</sup>半<sup>ニ</sup>御登城被成御侍日の出に 相国様御成駿河殿水戸殿御玄関の白砂<sup>ニ</sup>伺公被成御見見如毎御伴被成御敷寄屋へ御はいり御中立之時駿河殿水戸殿<sup>者</sup>御勝手へ御立御手水御つかひ被成御花うつき 相国様被遊候

- 一 御茶入 なげつきん 一 御花入 鶴の一声
- 一 御釜 織部釜 口のひろき也 一 御水さし まぼしは也

御茶之次第 相国様被召上 將軍様御頂戴それを駿河殿御頂戴それを水戸殿まいり和泉守被下立花飛騨守被下納 後の御炭相国様被遊候御茶過御座之間へ出御三献の御祝有

初献 相国様御初御盃 將軍様御頂戴其御盃相国様御上御盃駿河殿御頂戴盃 相国様上御盃水戸殿御頂戴其御盃相国様上納

二献 將軍様御初御盃 相国様上御盃 將軍様御頂戴御

盃駿河殿御頂戴其盃 將軍様上御盃水戸殿御頂戴其盃 將軍様上納

一 三献 相国様御初御盃 將軍様御頂戴御盃駿河殿御頂戴其盃水戸殿まいり其盃藤堂和泉守被下納 御能御見物五番目道成寺過 七五三の御膳上初<sup>ニ</sup>御手前三献の御盃相国様被召上候 御盃 將軍様御頂戴其御盃 相国様御上御盃駿河殿御頂戴其御盃 相国様上御盃水戸殿御頂戴其御盃

一 其御盃 相国様上御盃藤堂和泉守被下納御能過還御 卯月十三日 將軍様日光へ御参詣此日岩付御泊り十四日古河 十五日宇都宮 十六日日光へ御着

一 十七日御祭礼 廿一日江戸還御

一 廿三日於御本丸越後仙千代殿加賀犬千代殿於御前御元服被下御一字<sup>光長 各御腰物 政宗 中堂 末</sup> 銀子<sup>五百枚</sup> 拝領

一 同廿四日右之兩人西丸様へ御目見御腰物<sup>青江 国光</sup> 銀子<sup>二百枚</sup> 拝領

一 四月廿九日松平肥前守宅へ西丸様御成御相伴水戸殿御先へ外露地迄御座被成 相国様明六<sup>ツ</sup>半過候て御成堂の前<sup>ニ</sup>御目見敷寄屋へ入御之時供奉御中立御花 相国様被遊候

- 一 御かけ物 蜜庵 一 御茶入 このむら
- 一 太田茶碗 わりのかう 一 御茶入 かねのもの
- 一 かま 無銘

御茶之次第 相国被召上水戸殿御請取肥前守にと御はき候へハ水戸殿にまいり候へとの御錠にて水戸殿御頂戴それを肥前守のら申藤堂和泉守立花飛騨守ものら申候茶入つねのをし御覽の後御炭 相国様被遊候勝手へならせられ二階へ出御被成候へと水戸殿を御めし候て定家卿筆の歌書見せさせられ候扱て御成書院 出御被遊 七五三の御膳上 御盃の次第

初献御盃水戸殿御頂戴其御盃御前へ上御盃肥前守頂戴其盃御前へ上御盃筑前守被下其盃御前へ上納さて御能御見物四番過候て御膳上 初献二献御手前 三献御盃肥前守頂戴之時御道具拝領其盃御前へ上之時肥前守御道具奉献上其御盃筑前守頂戴仕候時御同道具拝領仕候其盃御前へ上之時筑前守御道具奉献上其御盃二番目の子息千勝頂戴仕

御茶之次第 相国様被召上 將軍様御頂戴それを駿河殿御頂戴水戸殿まいり藤堂和泉守立花飛騨守被下細萬御取



候時御道具拜領仕候其盃持て立納又別の御盃出御前正被召  
上御盃三番目の子息宮松頂戴仕時御道具拜領仕納 御能  
過還御

一 上野の下しのはすか池に大成鳥三羽飛来久敷たす是を  
見る人鳥の名を不知則自御城繪師を被遣鳥の形をうつし  
備上覽申候諸人御見せ被成候へ西海に者数多有候鳥  
と申候嶋鶉の類と申候

一 五月廿三日 將軍様駿河大納言殿へ御成御相伴ニ水戸殿  
供奉可被成との為上使松平伊豆守被遣同廿二日水戸殿為  
御礼登城それより西丸へ御越御目見へ廿三日北の丸外露  
地の堂の前にて水戸殿御目見敷寄屋へ入御之時供奉御中  
立

一 御かけ物一休市段 一 御茶入しわかたづけ  
一 御釜大かうた 一 花入きんちたう

御茶碗わりかうたい  
かりちい七の内 御茶之次第  
御前へ被召上それを水戸殿御請取候て駿河殿へ被進それを  
水戸殿まいり藤堂和泉守被下立花飛驒守被下納 茶碗御  
一覽御前へ飛驒守上 御茶入御一覽被成御茶入飛驒守な  
をし申候御成書院にて三献の御いわひ今度 將軍様御痘  
瘡御平癒被成候為御祝儀 三献の御いわひ出  
初献御盃駿河殿御頂戴のとき御道具拜領其盃御前正上御盃  
水戸殿頂戴其盃御前正上納  
二献御盃水戸殿頂戴其盃御前へ上御盃駿河殿御頂戴納  
三献御盃被召上之時駿河殿より御道具御進上其御盃駿河  
殿御頂戴其盃御前へ上御盃水戸殿御頂戴其盃御前へ上御  
盃藤堂和泉守被下納さて御能御見物四番過泉水の間の御  
座敷にて御膳上初献二献者御手前也  
三献の御盃駿河殿御頂戴其御盃御前へ上申候時駿河殿御  
馬御進上其盃水戸殿御前へ上御盃藤堂和泉守被下納 御  
能過還御 駿河殿 水戸殿御礼ニ御本丸へ御越御目見そ  
れより西丸へ御越御目見被成候て御帰

一 六月朔日 相国様駿河殿へ御成御相伴水戸殿早天正御越

外露地堂の前にて御目見敷寄屋正人御之時供奉ふるの御  
敷寄也御中立御花 相国様被遊候 御茶之次第  
相国様被召上候御茶水戸殿御取次被成駿河殿へ被進候水  
戸殿和泉守飛驒守被下納御茶入御一覽被遊各も見申候飛  
驒守なをし申候さて勝手へ出御則御能初四番過泉水の間  
にて御膳上

一 初献二献の御盃御手前三献御盃駿河殿御頂戴其盃御前へ上  
之時自大納言御馬御進上其盃水戸殿御頂戴其盃御前へ上  
御盃藤堂和泉守被下納能過還御御跡より御礼に西丸様へも  
御本丸へも御越被成  
同五日 將軍様御痘瘡御平癒の御祝ニ西丸へ 將軍様出  
御水戸殿供奉可被成との御上使として青山大藏を被遣則  
西丸へ御礼ニ水戸殿御越御本丸へも御越四日の夜七ツに  
御支度駿河殿水戸殿明六ツに御登城出御を御待候へ者御  
先ニ御座候へとの被仰出ニ付明六ツ半駿河殿水戸殿西  
丸へ御越御待被成候 將軍様出御被成御座の間二三献  
の御いわひ

一 初献 相国様御初將軍様御頂戴其御盃 相国様上御盃駿  
河殿御頂戴其御盃 相国様被召上御盃水戸殿頂戴其御盃  
相国様被召上納  
人を切候者有之候はば其屋敷之者出合何方へも追掛留置  
刀脇指を取り細を相尋奉行所へ注進すへし若刀脇指不出  
すまひ候はば打殺ても不苦右之者追懸之時者さまざまの屋  
敷よりも急度出合可留置者也然者昼夜によらず屋敷の前  
にて人を切候事不知におもては其屋敷ニ番油断たるへき  
者也

一 寛永六年 六月廿日  
六月上旬より稲毛筋目黒の村瀧不同へ俄に參詣諸願成就  
之由にて江戸中老若男女引も不切群集す此所往古より古  
跡たりといへ共新ニ人は参詣す  
一 廿日過より將軍様御氣分悲敷是ハ當夏毎よりも水を多被  
召上候ニ付御熱甚御坐候由道安玄治御菓調合仕無程御氣分  
御快然

一 七月九日當年大坂御城加番衆被下御暇御目見日根野織部

一 水野隼人酒井右近皆川志摩松平美作守御帷子御單物拜領  
七月十三日公方様御氣色御本復為御祝御本丸正相国様御  
成是者生御靈之御祝に御座候間御能の上ニおとりを懸御  
目度由 公方様御内意を西丸老中へも被仰遣御老中何  
も相談申候へ大御所様終ニおとり御上覽被成候事不覚候  
二献 將軍様御初御盃 相国様被召上御盃正將軍様上御盃  
駿河殿御頂戴其御盃將軍様上御盃水戸殿頂戴其御盃 將  
軍様上納

一 三献 相国様御初將軍様御頂戴御盃駿河殿御頂戴其盃水  
戸殿まいり其盃藤堂和泉守被下納さて御能御見物三番過  
七五三の御膳上初献 御手前へ御盃 二献同前

一 三献 相国様御初御盃將軍様御頂戴其御盃相国様上御盃  
駿河殿御頂戴其御盃相国様上御盃水戸殿御頂戴其御盃相  
国様上御盃藤堂和泉守被下納御御庭御見物被成御能御覽  
御能過還御  
六月十七日 將軍様上野南光坊僧正へ御成前日大御所様御  
成之如作法御宮へ御參詣藤堂和泉守於意松院精進之御  
膳進上御能御茶如先日駿河殿水戸殿御相伴銀子二百両延  
寿之御腰物御前被下也

一 當巴年春の半より江戸中端々ニ白昼にも人を切申事幾  
はくといふ数をしらす日暮方には町中にも人を切其躰  
更に物取に切にもあらず大形切捨也老若をいわず是々千  
人切といふものにて候哉後に者御城之内北の丸御門先に  
ても切之諸人往来待合大勢にて道をも通り申候依之御法  
度書出

一 間申上候て御機嫌如何可有と存申かね藤堂和泉守此儀令  
相談候和泉守承老躰役ニ我等可然様ニ可申上と申候て則  
西丸へ參 將軍様思召之段可然様申上候間御機嫌のおと  
り御上覽可被遊由之 上意御坐候ニ付御殿主の下御花畑の  
わきにかりふたひたちナシ保生金剛下何に御能十二番  
但より五番目に御膳上相国様奥ニあかり候將軍様御敷寄  
但屋の御勝手にてあかり候駿河殿水戸殿は黒書院にてま  
い御酒半に將軍様出御御しハ被成候御能過候ておとり御  
座候御相伴 天海大僧正藤堂和泉守也大御所様御機嫌の  
御意被成候は若年の時聚楽キリゴにて御見物のまま久々ニて御

一

上覽之由御意被成おとり一番過還御もおとり五番御用意被成候処 一番御上覽被成候間残四番

- 一 七月十六日大坂替之御横目衆御目見得黄金五枚ツッ拝領
一 七月廿七日大徳寺之僧玉室沢庵妙心寺之僧桃源單傳四人

配流澤庵<sup>音</sup>羽州上の山玉室<sup>音</sup>奥州赤館桃源津縣單傳<sup>音</sup>由利江御預也是<sup>音</sup>去寛永四年七月板倉周防守下向之砌被仰出候御法度書<sup>音</sup>諸宗出世之儀 權現御法度書<sup>音</sup>相背漫有之由被開召之間三条中院窺<sup>音</sup>窺慮御法度以後出世之者先相押共上重<sup>音</sup>器量を御吟味被成可被仰付事諸宗出世之前後御法度書<sup>音</sup>相違之者出世之儀望之はば向後執奏無之様<sup>音</sup>三条中院と相談可申渡事

- 一 右之時分大徳寺より沢庵玉室 江月妙心寺より桃源單傳
一 二人御訴訟申上候へ大徳妙心両寺之僧五十未滿<sup>音</sup>而出世

開堂紫衣之儀御法度之旨<sup>音</sup>相違之様 候へ共更不私候其人<sup>音</sup>之修行窮候人へ門中相初一山評定同心仕吹拳状を相調さて禁中へ令奏聞其日<sup>音</sup>住持入院之儀被仰出候事先例少も背不申候由又參禪修行三十年一千七百則之儀無相違可有之由御尋候是<sup>音</sup>案文を調懸御日候仁不案内に申候大底に千七百と申候へ共九百六十三人御坐候<sup>音</sup>而外者名計にて言句傳記無之候昔より代々傳來之通に勤來候間以前之出世開堂仕候様<sup>音</sup>被仰付可被下候御法度書以後之出世相押重<sup>音</sup>可被仰付儀致迷惑候由違<sup>音</sup>御訴訟難申上御免許無之

此内大徳寺龍光院の江月へ何様にも上意次第と被申上殘四人<sup>音</sup>付上意自分之御訴訟申上候事曲事被思召付<sup>音</sup>而被為配流大徳妙心之出世向後執奏無用之由傳奏衆へ被仰付此内沢庵<sup>音</sup>其頭但為出石の入さ山へ山居閑林して閉閑すといへ共宗門の浮沈無是非<sup>音</sup>當月々江戸へ下御訴訟申上柳生但馬守宗矩一首の歌を贈る

思日入や思ひ入さの山住もうきははなれぬ浮世なりけり

返し

いつくにもこのころのおくの入さ山をうき世のさかそ  
君は見るかな

- 一 沢庵玉室那須浅道迄同道玉室<sup>音</sup>内藤豊前守<sup>音</sup>御預<sup>音</sup>にて太

田原よりわかれ沢庵<sup>音</sup>土岐山城守に御預上の山へ赴玉室<sup>音</sup>榎倉<sup>音</sup>赴別離の詩有

- 一 芳春老与羅官事已停因自野下州太田原分路芳春老赴奥州赤館之配子赴出羽ノ國上ノ山賦一絶以袖裏之<sup>音</sup>
一 天分南北両飛鳥 何日旧栖双●販

聚散無常只如此 世情禽亦有樞機  
南崇堂頭臨離袖有尊偈謹奉汚芳韻  
草鞋竹杖傍空飛 旧院何時犯手販  
水遠山長猶絶信 別離今日已忘機  
八月二日 相国様稲毛<sup>音</sup>御成御鷹野御物敷あり還御<sup>音</sup>於目黒御鉄炮にてひしくいを被遊其晚 將軍様へ被為進  
同五日於御本丸菱喰御ひらきの御振廻御連枝御家門御譜代衆御料理被下

- 一 同十日 將軍様水戸殿へ御成十日の夜七ツ半水戸殿御迎  
一 御登城伊丹播磨守<sup>音</sup>御横目衆<sup>音</sup>被申置御掃日の出に將軍様御成水戸殿外露地の表<sup>音</sup>何公被成御目見それより内露地のくくりのさわに何公被成候処<sup>音</sup>御先へとの御意にてくくりの戸を明御先へ御はいり候いろり御口切の御數寄御膳御引物之通ひ水戸殿被成候御中立

一 御かけ物<sup>音</sup>中ふう 一 御茶入<sup>音</sup>ふんわん  
一 御茶碗<sup>音</sup>そめ付 一 御釜<sup>音</sup>うはたち  
一 御花入<sup>音</sup>青海波

御花 將軍様被遊候白ふしひかへ赤八重のむくけ  
御茶之次第  
將軍様へ召上それを駿河殿水戸殿と御じき<sup>音</sup>而駿河殿御頂戴さて水戸殿<sup>音</sup>まはりそれを和泉守被下飛驒守被下納

後の御炭 將軍様被遊候さて御成書院三献の御いわひ  
初献<sup>音</sup>駿河殿御頂戴其盃御前へ上御盃水戸殿御頂戴其御盃御前へ上納

二献御盃水戸殿御頂戴其御盃御前へ上扱當麻の御脇指水戸殿御拝領従水戸殿貞宗之御脇指被進献之其御盃駿河殿御頂戴納

- 一 三献御盃駿河殿御頂戴其御盃御前へ上御盃水戸殿御頂戴納

さて御能初三番目の楊貴妃過於御成書院七五三の御膳上其さま御引替之御膳出初献二献御手前 三献たいの物御盃水戸殿御頂戴其御盃御前<sup>音</sup>上御盃駿河殿御頂戴其御盃御前へ上御盃藤堂和泉守被下納御能過還御

- 一 八月十五日 相国様水戸殿<sup>音</sup>御成十一日水戸殿<sup>音</sup>西丸へ御めし十五日御成可被成旨御直<sup>音</sup>被仰出候則水戸殿御礼御申上御本丸へ御越御目見前日十四日水戸殿御礼<sup>音</sup>両御所様へ御越御目見十四日夜の七ツ半に御迎<sup>音</sup>御登城日の出に相国様御成外露地口迄水戸殿御出御目見内露地くくりのきわに何公被成候へ<sup>音</sup>御先へとの御意にてくくりの戸を御あけ御先へ御はいり被成候御本膳御二膳のかよい<sup>音</sup>水戸殿御肴二三度御持參御酒<sup>音</sup>三返にて納御道具共 將軍様の時に同御花<sup>音</sup>茶山花ひかへむくけ赤八重なり 相国様被遊候

御茶之次第  
相国様被召上水戸殿御頂戴藤堂和泉守立花飛驒守被下候御茶碗御覽後の御炭 相国様被遊候さてくさりの間へ出御被成候かさり御一覽度々御坐候定家卿自歌自筆の巻物御ひらき御一覽さて御成書院<sup>音</sup>出御御菓子あかり其さま御能御見物四番目の三輪過候て於御成書院御膳上 御盃之次第  
初献二献<sup>音</sup>御手前之御盃  
三献榮勝院殿より上御盃の臺にて相国様被召上御盃水戸殿御頂戴其御盃御前<sup>音</sup>上時従水戸殿御馬御進上其御盃本多美濃守被下納さて御能過還御也

七月羽州 被為配流澤庵於配所八月十五日夜の詩歌有  
元是溝光私照無 巴陸日本洞庭湖  
今宵可惜十分影 月亦明天哥哥圖  
もかみ川はやせの月もなかれては  
しはしうきせに住かひもなし  
おもひきや今宵の月をうちのくの  
あしやの松のかけも見んとは

妙心寺桃源 津輕へ御預於秋田  
幾隔山河赴遠流 不知何日太刀頭  
西風吹送秋田浦 身是津輕一葉舟

一

一

- 一

一 九月二日西丸様土井大炊頭宅へ御成御相伴水戸殿夜の七ツに御支度御出日の出に 相国様御成外露地にて御目見数寄屋へ入御之時供奉 御中立御花 相国様被遊候赤ほけひかへ風くるま花入<sup>へ</sup>かねの物 御茶之次第

相国様被召上水戸殿御頂戴大炊頭被下和泉守被下飛驒守被下納茶入何も前のごとく御覽後の炭 相国様被遊候さて御成書院へ出御御能御見物道成寺過候て於御成書院七五三の御膳上追付御引替の御膳出 初献二献御手前之御盃

三献御盃水戸殿御頂戴其盃御前へ上御盃大炊頭<sup>ニ</sup>被下時御脇差拝領<sup>金森</sup>別の御盃出 相国様被召上御盃大炊頭惣領松千代被下時御脇指拝領二男鶴千代にも御盃頂戴御脇指拝領扱御能御見物被成御能過還御

一 九月十日卯刻京清水寺炎上坊中迄一字も不残之由同十六日申来

一 同廿一日伊勢太神宮之社御普請出来御遷宮有之

一 九月廿一日 西丸様御本丸へ御成御相伴駿河殿水戸殿也御兩人七ツ半御登城殿上之間<sup>ニ</sup>御待夜のひき明に 將軍様御迎<sup>ニ</sup>出御御縁かはにて御目見 相国様御成之時御玄關の白須に伺公御目見御小書院通御先へ御まはり御教寄屋口へ御越御教寄屋へ入御之時供奉

一 御茶入 <sup>なげつきん</sup> 一 御茶碗 <sup>かわらい</sup>  
一 御水さし <sup>まほしはこ</sup> 一 御花生 <sup>わりかうたい</sup>  
一 御かけ物 <sup>一山</sup> 一 御釜 <sup>申候しんとう</sup>

御中立御花 相国様被遊候白桃のかへり咲ひかへしら玉椿 御茶之次第

相国様被召上 將軍様御頂戴駿河殿御頂戴水戸殿まいり  
和泉守飛驒守被下納  
後の御炭 相国様被遊候御炭過候<sup>而</sup>御寝間へ出御被遊御うす茶被召上其後御能御見物四番過御膳上 初献二献御手前

三献御盃 相国様御初其御盃 將軍様御頂戴其御盃 相国様被召上御盃駿河殿御頂戴御肴 將軍様被進其御盃 相国様被召上御盃水戸殿御頂戴御肴 將軍様被進其御盃 相国様被召上御盃藤室和泉守被下納さて御能御見物御所

望二番有之橋弁慶<sup>七夫あふひの上</sup>御能過還御  
金地院崇傳長老本光国師<sup>者</sup> 権現様の御代より相詰在江戸侯へ共遂<sup>ニ</sup>御成無御坐候付<sup>而</sup>十月十七日 相国様金地院へ御成可被成由十五日<sup>ニ</sup>被仰出御相伴水戸殿藤室和泉守立花飛驒守也十七日無御社参

同日七ツ半水戸殿御支度国師へ御越御待日の出に 相国様御成外露地の堂の前にて御目見数寄屋へ入御之時供奉御中立御花相国様被遊赤ほけのひかへしら玉花生かね物

御茶の次第  
相国様被召上水戸殿御頂戴それを国師それを和泉守被下それを飛驒守被下納後の御炭相国様被遊候さて御勝手へ出御御能四番過御膳上 御盃之次第初献二献御手前三献御盃水戸殿御頂戴其御盃御前へ上御盃国師頂戴其御盃御前へ上御盃藤室和泉守被下納御能過候て還御金地院国師拝領物呉服十銀子二百枚

一 十月廿日於西丸御口切之御教寄 將軍様出御御相伴水戸殿七ツ半<sup>ニ</sup>御登城的場くるわの高木筑後守所 御待將軍様出御被成候供奉<sup>ニ</sup>て教寄屋へ入御被成候御中立之時<sup>へ</sup>駿河殿水戸殿御兩人<sup>へ</sup>脇へ御越御手水御つかひ候て御教寄屋へ入御之時供奉御花<sup>香</sup>梅ひかへうす色

一 御かけ物 <sup>きどう</sup> 一 御茶入 <sup>ならしは</sup>  
一 御釜 <sup>織部かま</sup> 一 御花入 <sup>辨正</sup>

御茶之次第

相国様被召上將軍様御頂戴それを駿河殿御頂戴それを水戸殿まいり藤室和泉守被下御茶碗水戸殿將軍様へ御上被成候得 則御なをし被成候御茶入も順々に御一覽是をも水戸殿將軍様へ御上被成候將軍様御なをし候付和泉守不自由之故水戸殿御取次被成候後の御炭過候て御勝手へ出御被成それより還御なり

一 十月廿二日 公方様不図西丸<sup>ニ</sup>出御水戸殿駿河殿も御出候得<sup>者</sup>折節相国様山里へ被為成還御を御待先日廿日御教寄屋に富士見へ不申候を御残多思召教寄屋被成御座富士御覽可被成候由御使御坐候駿河殿水戸殿にも供奉可被成

との御詫にて將軍様御伴被成大手へ御まはり外露地口より入御被成露地御見物にて御教寄屋を御通り候てくさりの間へ出御被成候へ<sup>へ</sup>相国様御手前にて御茶御坐候御茶之次第

相国様被召上將軍様御頂戴駿河殿御頂戴それを水戸殿まいり納後の御炭有之

一 御茶入 <sup>せいたか</sup> 一 御茶碗 <sup>わりかうたい</sup>  
一 御水さし <sup>古織部ほりいたし上申候</sup>  
十一月十日今上皇帝御厩<sup>シ</sup>御詠歌あり  
うき事のなくともやすく背く世に  
あわけすてもおしからぬ身を

御代継の太子も無御座候間姫宮御即位可被成よし院宣なり女帝先例御坐候由にて第一の姫君皇太子に被為立御躰祚あり  
私学校寒松に尋候得<sup>者</sup>女帝<sup>者</sup>祢徳天皇以来久敷絶て無御坐候処不思議に又如此末代の奇特也昔の唐人日本を東海姫氏国と文にも書候天照太神宮を初神切皇后女神にてたけき御事也其後齋明持統祢徳皆以女帝也末代に至<sup>而</sup>不図女帝御坐候事は姫氏国の故なるへしと物語也

一 十二月廿六日 相国様丹後守宅<sup>江</sup>御成御相伴藤室和泉守丹羽五郎左衛門三献之御盃にて丹後守頂戴之時貞宗之御脇指金子三百両拝領子息兵部御盃頂戴之時御腰物 拝領御能御上覽之後還御

江城年録 五

寛永七年 庚午正月

元之御家門御出仕公方様西丸へ為御礼御成還御以後御礼  
初 初献御盃紀伊殿駿河殿水戸殿御頂戴盃前へ上御盃松  
平伊豫守頂戴納各御盃頂戴時服御拝受 二献御盃駿河殿  
紀伊殿水戸殿御頂戴盃御前之上御頂戴盃松平伊与守被下納  
三献御盃紀伊殿盃駿河殿盃水戸殿盃松平伊与守納  
二日御家門西丸へ御出仕如例年明六ツ半登城於西丸御  
盃之次第 初献御盃紀伊殿水戸殿御頂戴盃御前へ上 御  
盃松平伊与守納 二献御盃紀伊殿盃水戸殿盃松平伊与守  
納 三献も二献同之  
二日之晩御本丸御詔初暮六ツニ初御盃次第初献御盃紀伊  
殿駿河殿御頂戴御前へ上御盃水戸殿盃通 三献のふき御  
盃御ひかへの時觀世四海浪を謡御盃紀伊殿駿河殿盃通  
御はやし有上臺の披露有紀伊殿御進上之臺之御盃紀  
伊殿御肴星之物拝受其盃通  
駿河殿御進上之臺之御盃駿河殿御肴星之物拝受其盃  
通  
水戸殿御進上之臺之御盃水戸殿御肴星之物拝受其盃通  
此次ニ諸大名ニ御盃被下  
別之臺出御盃紀伊殿御肴星之物拝受盃通  
同前御盃駿河殿御肴星之物拝受盃通  
同前御盃水戸殿御肴星之物拝受盃通  
正月十九日於西丸禪宗之法問御聴聞被成 大中寺 龍穩  
寺 青松寺 本則 六十捧也 水戸殿 紀伊殿 駿河殿  
何も御出仕  
廿日御具足之御祝御連歌有

一 花みとり四方におほふや世々の松 昌琢  
雪晴し日の久かたの春 御

今願遠し鷹のとかへる山みへて 玄仲

廿二日 相国様御本丸へ御成駿河殿紀伊殿水戸殿夜  
の八ツ半に 御登城殿上之間ニ御待將軍様御迎ニ出御  
の時御縁かはへ御三人御出御目見 相国様明六ツニ御成  
御衣閑しらすにて御目見御伴被成候御小書院通御先へ御

まわりにて御敷寄屋口ニ御座候て入御之時供奉

一 御茶入 なけつきん 一 御花入 露のこへ  
一 御かけ物 織牛ノ類 一 御茶碗 はりかうたい  
一 御水さし まほしはこ 一 御釜 あらし  
御中立御花 相国様被遊候 芝梅ひかへしら玉  
御茶之次第

相国様被召上將軍様御頂戴御盃紀伊殿御頂戴御盃駿河  
殿まゝいり水戸殿まゝいり御茶之時計藤堂和泉守罷出被下さ  
て丹羽五郎左衛門被下之御茶碗御一覽被成候て五郎左衛  
門御なをし申候御茶碗御一覽も五郎左衛門なをし申候  
のちの御炭相国様被遊候御寝間にて 三献の御いわいの  
次第 初献 相国様御初將軍様御頂戴御盃 相国様上  
御盃紀伊殿御頂戴其御盃相国様被召上御盃駿河殿御頂  
戴其御盃 相国様被召上御盃水戸殿御頂戴其御盃相国様  
被召上納  
二献將軍様御初御盃 相国様被召上其御盃將軍様御頂戴  
御盃紀伊殿御頂戴其御盃相国様被召上御盃駿河殿御頂戴  
其御盃將軍様被召上御盃水戸殿御頂戴其御盃御前へ被召  
上納  
三献御盃相国様御初御盃將軍様御頂戴御盃紀伊殿御頂戴  
其御盃駿河殿まゝいり其御盃水戸殿まゝいり納能御見物五  
番目の殺生石過候て御膳被召上初献二献御手前三献御  
盃將軍様御頂戴其御盃御前へ被召上御盃紀伊殿御頂戴其  
御盃御前へ被召上御盃駿河殿御頂戴其御盃御前へ被召上  
御盃水戸殿御頂戴其御盃御前へ被召上納御能過還御

一月廿六日將軍様雅樂頭宅ニ御成水戸殿駿河殿毎の  
時分に御登 城敷寄屋へ入御之時供奉

一 掛物 拝領 一 茶入 手前 ぶんりん  
一 花生 かねの もの

御花 將軍様被遊候あかきふけひかへしら玉椿  
御茶之次第

將軍様ニ召上御盃駿河殿御頂戴其御盃水戸殿まゝいり雅樂  
頭被下それを丹羽五郎左衛門被下納  
茶入順々に御一覽被遊候取次五郎左衛門仕以後の御炭  
將軍様被遊候さて勝之出御泉水の間に御くつろげさて御

能御見物三番過於御成書院御膳被 召上

初献二献御手前三献の御盃駿河殿御頂戴其御盃御前へ  
被召上御盃水戸殿御頂戴其御盃御前へ被召上御盃雅樂頭  
被下候時吉光の御脇指拝領納の御盃出御前へ被召上候時  
雅樂頭御道具奉献上之御腰物當磨御脇差光包其御盃阿  
波守被下候時眞守の御腰拝領阿波守子与四郎成国俊の  
御脇指被下之御能過還御

正月命酒井讃岐守忠勝西丸吹上門之櫓ニ當  
二月十三日公方様堀丹後守宅へ御成御相伴藤堂和泉守  
立花飛騨守丹羽五郎左衛門式三献之御盃出丹後守頂戴  
之時御腰物 助光 金二百兩拜領之時御腰物 玉光 丹後守御  
成候儀為可申上作事仕御成御殿以下美ニ敷造宮仕候處ニ  
西丸様御意被成候御小身之丹後守御成候儀申上候て御譜  
代大名衆各御成候儀申上候儀御座候はば何もへ御成候儀  
者難成候思食候間丹州宅ニ被為成候事御遠慮ニ被思召

候ニ間御用捨可被成由御意被成候付西丸様御成無御座候  
はば公方様も御延引可被成ニ而既ニ御成之用意も延引  
罷成候處ニ土井大炊頭相国様江上候へ堀丹後守御成候  
儀可申上こ免御成書院之普請以下訂託を尽し其間  
天下に隠無御座候然者御遠慮御座候て御成不罷成候へ  
バ丹後守者世を捨引籠申より外之儀御座有間敷

候何之面目御坐候て人々面ヲ合可申候也扱て不便無是非  
仕合ニ候ものかなと懇ニ申上候ニ付て西丸様丹後守方へ  
御成可被成由被仰出御成有公方様も今日御成御坐候  
是ハ土井大炊頭申上候より丹後守施面目候由之風聞也  
二月廿日西丸様紀伊大納言へ御成御相伴水戸殿丹羽五  
郎左衛門藤堂和泉守立花飛騨守等なり

御中立  
一 御かけ物 しりんせき 一 御花入 おとつき  
一 御釜 きりこ 一 御茶入 あけの衣

一 御水さし いもかしら 一 御茶碗 あらし

御花 相国様被遊候白桃ひかへうす色かはり椿  
御茶之次第

相国様被召上紀伊殿御頂戴それを水戸殿まゝいり丹羽  
五郎左衛門和泉守飛騨守被下納御茶入順々に御一覽御取

次へ飛驒守仕候後の成 相国様被遊候さて御能御覽四番  
過御膳上 初献二献御手前 御盃 三献御盃紀伊殿御頂  
戴其御盃御前<sup>三</sup>上御盃水戸殿御頂戴其盃御前<sup>二</sup>被召上和  
泉守<sup>二</sup>下納御能過還御

二月廿一日於酒井雅樂頭宅寄合之時法宗身延上人日暹と  
池上之上人日樹と對論有奉行へ酒井雅樂頭同讚岐守稲葉  
丹後守内藤伊賀守聽衆天海僧正金地院国師道春永喜  
黒子仙名寺也

右不受不施之論へ日樹師妙覺寺之日奥於大坂不受不施  
之邪儀を申立京中之一宗之諸寺と及問答候得共日奥負令  
配流其後常之大赦之時蒙御免罷掃弟子日樹猶以不  
受不施之儀を申上候させ去<sup>ル</sup>寛永三年崇源院殿御帛  
之時日樹御不施を不受身延御布施を給り候事を散々に  
悪口して身延へ參詣する者隨獄之人と申ひろめ一味同  
心の同俗男女尊此儀を信ず依之去年より身延日暹搦  
訴状請對論

身延山住持比日暹  
謹而言上

豊臣太閤秀吉公於妙法院門跡一千僧侶以修供養以由貴  
命法華宗亦列其數矣然妙覺寺住持日奥日此之受供養は謗  
法隨獄之罪業也云々一宗學者曰彼不知謗誹正法之相●●不  
辨古來立制之元由恣吐妄說一何痛哉於是洛陽之諸寺伏請  
決是非因茲慶長巳亥歲

東照大権現神儀召諸寺上人及日奥於大坂御殿令遂對決任  
理非決断之旨以尊命令彼一僧沈於憂獄論於謫於遠島竟難難販  
旧寺我孰未翻誹誹未止而今池上日樹欲救彼邪義違背昔年  
之嚴旨忽對於吾山妄加謗言曰身延山前任日住日乾受千僧  
供養故山既成謗法之地參詣之輩當隨阿鼻地獄仍抑止參詣  
停留供養矣如斯之形于文墨巡回諸国殊登高野普告諸人欲  
速滅却身延山所以盲瞶之流迷惑是非信謗相半宗門陵夷方  
在此時闔衆悲哀之餘事不獲已奉驚高聰

池上日樹曰国主供養は謗法施故不可受用云外ニハ作此  
唱内亦受用国主所施田園以當伽藍排燈燭矣心口既違内外  
全背●謂之道人乎夫国君州主令長等所以施田園於沙門寄  
郡郷於寺院者護持無上正法四海安寧之懇祈修戒定惠為良

福田故也宝梁経云若不梵行言梵行破戒言持是人乃至大地  
無唾處況東去屈伸何以故過去大玉持此地施於持戒比丘有  
德之人於中行天道天台知者梵網疏云帶罪愧不得受施国主  
本以地水給有德之人無有德行不得受用與成師引倉疏云白  
衣無戒食水土皆輸稅出家不稅良為戒行我祖所判其趣  
亦復如是諸餘経釈恐繁且留矣於此一義諸宗皆同曾無異論  
者敵而日樹獨立異計是非非乎

先年千僧供養已來都鄙之一宗道俗貴賤悉皆通用互相恭敬  
互相供養故不可分信謗差殊日樹獨立異儀日身延は謗者池上  
者信者況復日樹無簡身延山信仰之緇素飽受其施然則傍者  
隨獄之檢責却蒙自身負識之徒誰不測之乎敬乞上來節目率  
由旧規以無無理誠恐惶頓首頓首

久遠寺

寛永六 二月廿六日 日暹  
進上 御奉行所

右之法論去年より互<sup>三</sup>扱ありといへ共日樹不用井中山之  
日賢中村之日充碑文屋之日進平賀之日弘六人一味 身延  
之日暹<sup>非</sup>隱居日乾同日遠玉沢之日道茂原之日東三松之日  
長六人一味今日及對論去慶長四年十一月於大坂御殿不受  
不施之論有之其时日奥日負令配流者今又弟子之日樹事  
を申立段曲事之由にて経文并天台妙樂傳授<sup>敬</sup>釈祖師之立  
儀尊氏公以來之寄進之御證文元弘三年五月十二日之御口  
宣つつ永喜説之日樹方之同寺領者為祝儀非供養其上先年  
權現様先非を御後悔有之日奥御免被成板倉伊賀守日奥方  
へ祖師以來之如制法可任先規之例之由送折紙を出し  
出し日暹を被為流罪日奥配流却<sup>非</sup>面目なりと申日暹日遠  
寺領者供養也といふ證文數通出す其上日奥御免候儀者先  
非を御後悔の儀にあらす非常之大赦には盜賊人を御免也

日奥一人の事にあらず四百年來之祖師之経釈之文義不  
拘近代京都所司代之文書を以宗風を可立や否此返答に不  
及日樹今日中風氣故不及對談と申永喜か言殘五人可被申  
由五人も閉口扱両方退座

其後一月程ありて日奥者衣を取對馬国へ配流日樹者信州  
伊奈へ配流殘五人追放日奥弟子住善院日樹弟子長遠院此

二人者折節在京にて流罪之内に者不入  
被仰出候事 池上日樹違目之事

池上日樹今度申上候不受不施之儀 先年  
權現様邪義に開召日奥を遠嶋<sup>二</sup>流罪被 仰付候然処唯今  
其御さはきを違背申又不受不施候儀申出候事不届<sup>二</sup>被  
思召付日樹者信乃国伊奈へ御預被成候徒黨之出家者御追  
放候事

板倉伊賀守折紙の有之由此折紙文言之儀曾以御覺不被成  
候事縱伊賀守一札有之とも  
權現様御さはき被成候処を翻し申立候儀曲事<sup>二</sup>被思召候  
其上<sup>一</sup>札之年月日相違候所御不審<sup>三</sup>被思召候事

日奥儀者伊賀守御詫言上申上候付御慈悲を以御前へも被  
召出候処今度張本人と申て  
權現様御さはきの旨を文致違背不受不施之儀日樹に申立  
させ書物以下相渡再犯之処別<sup>二</sup>曲事被思召候付日奥如  
最前袈裟衣を剥取對馬へ流罪被仰付候事

寛永七年四月二日  
卯月九日 西丸へ御敷寄屋にて公方様出御紀伊殿水戸殿御  
相伴九日早朝 御當所高木筑後守組之鉄炮番所<sup>二</sup>御待明  
し六 時將軍様出御供奉 御敷寄屋へ御はいり外露地の  
堂に將軍様被成御座候由<sup>二</sup>紀伊殿水戸殿を御召被成り御休  
さて永井信濃守御迎<sup>二</sup>罷出御敷寄屋正入御にちりあかり

の戸をも信濃守明申御草履をなをし申候  
一 御かけ物 同つかん 一 御茶入 せいたか  
一 御茶碗 紀三井寺 一 御かま 筋釜  
一 御水さし しからき 一 御花入 都かへし根つつの  
御炭過御膳出御中立候時紀伊殿水戸殿わき人御越手水御  
つかひ被成御花あかさうつきひかへ芍葉  
御茶之次第

相国様被召上にそれを將軍様御頂戴それを紀伊殿御頂戴そ  
れを水戸殿まいりそれから五郎左衛門飛驒守被下御茶碗  
おは飛驒守御前<sup>二</sup>上御茶入御一覽是を飛驒守申上候後の  
御炭過くさりの間へ出御紀伊殿水戸殿供奉御菓子蜜  
柑御うす茶<sup>二</sup>上各まいりさて還御  
嶋津方へ可被為成由被仰出御坐候付去々年より御成御

殿御成御門結構に普請仕候

四月十八日卯刻 公方様嶋津薩摩守宅へ御成御相伴加

藤左馬助丹羽五郎左衛門也琉球人参管紋仕候  
御座敷之次第 御教番屋三帖大目

一 掛物 碓石襖物 一 茶入 平野 かねたふの袋 此袋東山殿  
三足けりかうたい

一 茶碗 三足けりかうたい 一 茶杓 利休作

一 水さし 平有とも蓋 一 花入 かねのつ

一 香合 瑪瑙 山谷ト銘あり 一 釜 車軸

一 炭 ふくへ 一 棚 環羽帶

御花は將軍様被遊いろはつとの白と紫ともしに岩藤後の炭を被遊候

一 鎖之間へかさり 一 釜 白みのね 角毎 紋あり 頼朝公の御釜と申傳あり

一 茶入 瀬戸 袋箱二蓋 一 釜 頼朝公の御釜と申傳あり

一 棚の中二重に臺天目下に水さしへかねのつるへ南蠻物也  
一 罌爐裡之西の方に上壇あり書院の真中に鉦をかへる書院のかさり一休のちち視筆架に筆墨かたわらに羽箒をかくる硯の銘東坡居士とあり

一 罌爐裡あり釜は高麗なり

一 榻あり上になかつきの茶入其外庄道具略之

一 床に三幅一對 教深中 布袋贊 寧退耕

一 両脇は 朝陽贊 對月贊 狷絶掛繪之前二大机あり其真中落葉に翡翠の胡洞の香爐置之

一 さて御茶過鎖の間江出御被遊道具共御上覽寢床ニ御成  
御寝灘上壇の床に二幅一對をかくる 右龍揚月 氣其前 (石へんに間)

一 に花瓶二 池坊左は松

一 床之前ニ雉子鯉を置瓶子ニ重かさる其前 御床疊二帖敷

一 其上に錦の御ふとんあり御右之方御手かけ御左方御弓御

一 箆ニ征矢廿五刺弓へはつし弦をかうよりにて結び付内竹

一 を御前へ向立其次に鑑御甲を疊の上に置之 扱式三獻出

一 御伴衆并薩摩守也

一 床の左ニ三重の違ひ棚あり臺天目を盆にする水瓶紫銅の

一 鴨の香爐曲輪之食籠盆に居硯箱骨吐一對 御明 御阿茶在也 書院

一 の床に青磁の岩くみの硯屏風あり九山海の筆架曲輪の

一 ちくの筆古銅の牛の墨留古銅の梯の水入筆洗盆石黒ぬり

の鉢に居印籠を曲輪の盆居置書院の上につう香爐脇に拂子

一 御納戸の内ニ硯文臺此床の次の間に蒔繪の臺子の風爐釜

一 臺天目茶入水さし蓋置柄杓たて水建 是皆黄金を以

一 鑄也此次に西の方ニ二合の紙置もり物さしくはく式

一 三獻七五三三十二合也

於寢殿拝領

一 御太刀 正桓 一 御腰物 政宗

一 御小袖 百 一 御袷 二百

一 御夜物 かり二拾 一 越前綿 千把

一 銀子 三千枚

一 子息又三郎拝領

一 御太刀 來田光 一 御袷 百

一 銀子 五百枚

一 鳴津進上物

一 御太刀 黒一文字 一 御刀

一 御脇指 貞宗 一 御鎧甲

一 御弓御征矢 廿五刺 一 御鞍鏡 貞藏作

一 御馬 鹿毛 一 御小袖 百

一 御袷 百 一 紅糸 二百斤

一 生糸 千斤 一 黄金 三百枚

一 子息嶋津又三郎進上物は

一 御太刀 信國 一 御脇指 政宗

一 御袷 三十 一 銀 三百枚

一 御馬 鷄毛 等也

一 末子嶋津又十郎進上物

一 御太刀 一 銀子 二百枚

一 御袷 十

一 同末子嶋津越後進上物

一 御太刀 一 御袷 十

一 銀子 百枚

各御目見仕其外嶋津家來御目見之次第

一 嶋津彈正 嶋津相模 嶋津豊後

一 佐多丹波 樺山采女 北郷出雲

一 北郷佐渡 頼姪長左衛門 八木院石見

種々嶋左近

右之分御太刀一腰御袷十宛進上仕御目見仕候

一 家老向人 嶋津下野 伊勢兵部

一 御太刀一腰御袷廿進上仕御目見仕候

一 御能 高砂 親世 清経 長門守 源氏供養 七大夫 天鞍

一 黒塚 金奉 桜川 七大夫 玉かつら 長門守 呉服

一 琉球染人 思徳 十四才 真志金 十四才 思次良 十五才

一 江洲之呈主 十六才 天里 十七才 ひわしんせん 三線 笛 ひ

一 ちりき こち 鉦 太鼓 以上

一 同廿日嶋津父子為御礼登城西丸へも

一 同廿一日大御所様嶋津宅へ御成御馳走へ右同前但進物

一 之内小袖百 御太刀 包平 助平 御刀 貞宗 二百枚 御脇指

一 又三郎進物之内御太刀 助平 御刀 貞宗 二百枚 御脇指

一 二拾銀二百枚御脇指御太刀 長光 御刀 政宗 御小袖 百

一 御袷 百 御小袖 百 御袷 百 御袷 百

一 又三郎御脇指御太刀 御刀 吉家 御袷 十 御小袖 十 銀 五百枚

一 御袷 十 御刀 貞宗 銀 二百枚 又十郎御脇指 來田光 御袷 十

一 二百枚越後 御能 翁 十大夫 白鬚 金奉 実盛 長門守 海士 親世

一 熊坂 七大夫 自然居士 長門守 養老 金奉

一 同廿八日松平大隅守牧野内匠頭大番頭御免御留守居役被

一 仰付右大番之時之与力同心 酒井備後守御留守居仕候

一 時之同心も与力も召連參可申由被 仰付

一 永見新衛門御歩行頭御免御弓頭被 仰付

一 五月四日 相国様御本丸之 泉水御見物入御水戸殿紀伊

一 殿御相伴七ッ過御登城酒井雅樂頭屋敷前之橋酒井讚

一 岐守番所御待夜明ニ御門を御入二九御庭に御坐候御門之

一 前ニ面上様へ御目見被成唐門の内へ御伴被成御泉水之

一 前ニ御座敷ニ御膳上御上段ニ面上様ニ之間江紀伊殿

一 水戸殿御座候御相伴初獻二獻 御手前三獻之御盃將軍

一 様御頂戴其盃御前へ上其御盃紀伊殿御頂戴御看將軍様被

一 遣候其御盃御前之上御盃水戸殿御頂戴御看將軍様被進其

一 御盃御前へ上納御膳過鳥部屋之前御通御かこいく入

一 御被成 將軍様御手前にて御茶御座候 御茶の次第へ

一 相国様ニ召上それを 將軍様御頂戴紀伊殿御頂戴それを

水戸殿まいる加藤左馬助立花飛騨守被下納御花は相国様被遊候むらさき菊ひかへ御花入かねのつつ後の御炭 相国被遊御炭過又へ泉水の前成御座敷へ出御菓子御うす茶あかりさてつわとのへ出御紀伊殿水戸殿供奉釣殿よりすくに御本丸 御成紀伊殿水戸殿御先へ御越御成被成候と追付御能初五番目鞍馬天狗過御膳上御相伴紀伊殿水戸殿 御盃之次第 初献二献へ手前三献之御盃 將軍様御頂戴御盃紀伊殿御頂戴御肴 相国様被進候其御盃將軍様被召上御盃水戸殿御頂戴御肴 相国様 進其御盃將軍様上納御過還御 十八日服部中安藤治左衛門御歩行頭被仰付治衛門へ永見新右衛門跡 六月十一日大坂番植村出羽守同帯刀くみともに御目見御いとま被下 六月六日 相国様當月十七日増上寺へ御成可被成由被仰出同八日増上寺御札登城 十日公方様御水樋桜田内藤左馬助宅へ御成ため池に水戸殿をたてられ游御稽古左馬助御膳を上黄金三拾枚左馬助へ被下候 十七日 相国様増上寺へ御成御相伴水戸殿御先へ御越増上寺の堂へ御侍 相国様日の出に御成堂の前へ水戸殿御目見御社参供奉御宮より還御 上様も出院にて御物めしかへ被成候内ニ水戸殿も脇にて半袴めしかへすき屋へ入御ふらのすまん 御花へ相国様被遊候はすのまき葉ひかへ花也花生青地 御茶之次第 相国様被召上それを水戸殿それを上人正と御ちき被成候得者水戸殿まいる候へとの御説にて水戸殿御頂戴さて上人へ被進上人のみにて丹羽五郎左衛門加藤左馬助立花飛騨守被下納但御茶をは道具たてして勝手へ御被成法句御聽聞水戸殿長袴をめしかへ御聽聞僧百人にて法句有之法句見候てたか盛の御膳出御相伴水戸殿追付引替御膳出此時上人罷出御相伴 御盃之次第初献二献者御手前の御盃三献の御盃水戸殿御頂戴其御盃 御前へ上御盃上人頂戴納其ま還御 七月八日當年大坂加番被下御晦御目見時服袴領本堂伊

勢本多下松平玄蕃本多三弥 禅宗洞家之大中寺永平寺流罪大中寺 越後永平寺へ伊勢へ御預右大中寺天南之師松薫へ関東無双之法句僧にて権現様御代より大中寺洞家三ヶ寺ニ被仰付龍穩寺惣寧寺大中寺此三ヶ寺洞家の仕置を申付寺也今之天南も法句者無双之名人活僧也殘二ヶ寺者常在在所ニ罷有大中寺其在江戸也然永平寺近年致隠居大中寺を永平寺へ移して申内々約束也其時何とぞ禅宗出世之出家衆永平寺ニ計出世いたし惣持寺ニ出せ無用之由申付是へ去年妙心大徳両派之衆出世之儀相違候故罪科被仰付時洞家に別条之儀も無之候得共折を得惣持寺出世御法度被仰付永平計にて出世て仕由御意候由偽奉行衆之御法度出を謀出いたし諸国へ廻し申候へ付近年惣持寺出世之衆をさへ永平にて又出世仕候へと觸之間おさへられ候出家衆迷惑之由訴訟申付候御詮議罷成大中寺永平寺偽頭候罪科被仰付候 七月十七日大坂替之御目付被下御暇黄金五枚拜領河勝丹波永田庄左衛門 六月廿三日大地震天よりも降 七月四日織田常真逝去七十三信長二男 駿河大納言駿州三徳にて鉄鉤ニ御打打被成候由被仰羽の長両方へ四間計御座候大鳥を塩漬候て大御所様へ御上被成候鶴のごとく成鳥候得共名を存候もの無之候 八月四日盛右近大夫御内儀御逝去是へ加賀中納言殿御息女也 大隅守内匠頭跡大番頭被仰付保科彈正堀市正也但与力同心へ大隅守内匠付御留守居組ニ成候間彈正市正には新規に与力同心被仰付 小笠原老岐守大番頭被仰付是者新組之番頭にて番衆を所組より技參ニ組頭者書院番より津田八郎左衛門黒川八左衛門參候大番組頭より朝比奈左近平番より塚原次左衛門以上四人參候 當今女帝御即位可被成由酒井雅樂頭土井大炊頭兩人上路 九月十二日御即位ありて日本之諸大名使者を京都へ奉獻大炊頭雅樂頭被任侍従一條殿撰政也中院通村之代

りに火之大納言實勝為傳奏組三条内大臣実條者如元傳奏 九月廿九日 公方様御舟遊有 十月九日藤堂和泉守高虎 卒七十五号 寒松院高山道堅僧都 備前宰相思繼家来之者之事付安藤治左衛門阿倍四郎五郎久世三四郎と不思議成公事出来す是宰相家来河合半左衛門子又五郎と同家中渡辺數馬源太郎と喧嘩之事より起り此衆の申分に罷成候其子細者頃頃備前の城中に風流なるおとりあり見物せんとて待共之子共大形家を明て集る渡辺數馬女子共迄行留守に人も無之候処舍弟源太郎と申者致乱氣引籠居し見物ニ不参して宿に独り罷在候を河合又五郎と申者来打切申候數馬預り候歩行者遠山左兵衛と申者參會候へ共又五郎のき申候追かけ跡にさかり候者を老人打留申候其時見之數馬歸りて又五郎父半左衛門方へ使をたて留守無人の所へ押込理不尽の致し様侍の非本意候間是非押込打果し可申由申是により家老どものさはきにも罷江戸へ申越宰相殿へ申通候得共從江戸半左衛門侍一人指添江戸へ遣て申由申來候間野間八左衛門と云者を添江戸宰相方へ遣候処安藤治右衛門阿倍四郎五郎日頃此半左衛門目をかけ候間何とそ命を助度存候備前宰相殿舍弟を頼申を候へ半左衛門喧嘩之本人にて無之之旨命をは御助可被下候本人又五郎近国に罷在候間召寄出し切腹いたさせて申由各々取扱久世三四郎も加り被申間宰相合点いたされ候得者先半左衛門病者に候間早々請取申度 付先三人連判之手形仕請取可申由相濟扱手形を遣し半左衛門を請取申候此日安藤治右衛門へ當番にて判形不仕候間翌日判形いたさせて申由四郎五郎申候半左衛門請取翌日治右衛門申候我等當番にて不存候間判形之儀初より合点不申問仕問敷と致返答候しから半左衛門御返し候へと申候半左衛門も返す事罷成間敷由し宰相相手方より老中ニ申達申ふんに罷成候 同九月駿河大納言殿於駿河安養寺山の奥にまりこにて猿狩被成候猿を狩候事前代誰も不存ためしなき事

二番 御坐候殊ニ駿府の鎮守浅間江戸の鎮守山王皆猿  
を使社とす左様の無御氣遣筋なき御慰と諸人申候  
一 十二月十三日地震  
一 同廿二日大地震戌刻光物飛行大音あり